恋すれば歌詠み

岡本 明香里

一

まだ少し朝晩の肌寒さはあるけれど、昼間の風は暖かで、始まりの季節を感じさせる、そんな春のことだった。

キャンパス内の植木は青々と茂り、さわさわと音を立てながら揺れる。昼休みの青空の下のレンガの建物群は、大学案内に載っている写真そのままだ。つい先日入学したばかりで、このキャンパスの広さにはまだ慣れることができない。似たような赤茶色の建物がいくつも並んでいて、自分の目的の建物はここで合っているのかな、とよく不安になる。

その中でもひときわ目立って、美しいレンガ造りの建物の前を通りかかった。屋根がとがっていて、ガラス窓がいくつも取り付けられている。これまでに見慣れてきた日本家屋の建築様式とは違う、伝統的な西洋建築の建物の美しさに、つい見とれてしまう。この建物は、校舎案内には「礼拝堂」って書いてあった。キリスト教に関連する行事をしばしばやっているらしい。

入学前から興味はあった。けれど自分はキリスト教徒ではないし、気軽に入っていいものか、なんとなく入りづらさを感じていた。

礼拝堂を眺めながら、ゆっくりと歩く。入り口の前を通り過ぎて行こうとしたとき、前から男の人が歩いてくるのが見えた。背は高めで、体つきの細い、眼鏡の男性。物憂げな表情で、やや猫背ぎみに歩いている。アーチ状に作られた入り口をくぐり、礼拝堂の中へと入っていった。

その顔や背格好には見覚えがあった。

この大学を受験する前の日、大学近くのビジネスホテルで一泊した。京都の中心部にある大学なので、地元の福井から当日に移動するのは大変だからだ。

お母さんと一緒に電車に乗って、福井から京都に向かった。予約していたホテルのチェックインにはまだ時間があったので、近くで時間をつぶすことになった。御所を囲む京都御苑の中を、景色を見ながら通り抜ける。その先に小さな神社を見つけた。地図を見ると梨木神社、と書いてある。お参りはさっき北野天満宮でもしたって、とお母さんに言うと、お参りはやってやりすぎるもんやないんやで、と言われた。

石畳の参道を歩いていくと、おみくじなどの置かれた社務所があって、その向こう側に手水舎がある。柱の説明書きには、「当社境内は、藤原良房の娘明子御所跡で……」とかって書いてあるので、へえ、由緒正しいんだ、と思った。ここの水は染井の水と呼ばれているらしく、京都三名水のひとつというだけあって、とても澄んでいた。手袋を外して柄杓の水を手に受ける。冬の水はやっぱり冷たい。ハンカチで手を拭いて本殿に向かう。

参拝者を迎えるように構えている立派な門が立ち、のれんみたいに、丸い花のような模様が三つ並んだ白い布が冬の風にはためいていた。門をくぐると何かの舞台のような小さなお堂があって、その周りをぐるりと取り囲むようにして参道が続いていた。

私たち以外に参拝者はいないのかと思っていたら、ちょうど男性が一人、参拝しているところだっ

た。拝殿に正対して手を合わせている。その時間がやけに長い。お母さんと二人で黙ってその人の参拝が終わるまで待った。

振り返ってようやく私たちに気づいたんだろう。眼鏡をかけたその人の顔に、驚きと気まずさが出ていた。

「すみません」

慌てて私たちに一礼して、グレーのロングコートを着た細身の体をひるがえし、そそくさと立ち去った。礼儀正しい人なんだろうと思った。普通はすいません、て言うところを、すみません、なんて、「み」をきちんと発音したから。

参拝から帰るとき、それにしてもあの人は何をあんなに一生懸命祈ってたんやろね、と言い合った。ずいぶん長いこと参っとったよね。神道に熱心な人なんやろか。そんな会話をしたことを覚えている。

今、礼拝堂の中に入って行ったのは、多分その人だと思う。

この大学の人だったのかな。先生？　いや、大学の先生ならもうちょっと堂々と歩いてもいいような……。なーんか先生っぽくない。学生かな？　にしては、年が上だよね。いやでも大学だから、社会人学生ってパターンもあるよね。それか、職員さんとかかなあ。けどここの大学って、ちょいちょい観光客っぽい人も交じってるし……。

気になって、少しどきどきしながら私も中を覗いてみた。立て看板があって、「ご自由にお入りください。見学はお静かにお願いします。飲食・喫煙はご遠慮ください」と書いてある。神聖な場所なのだと思い、足音を立てないようにそっと中へ進むと、確かにあの人はいた。というか、その人だけだった。自由に開放されているからといって、多くの人が訪れるわけではないのだ。

正面奥の講壇に向くように、木製の長椅子が一定の間隔をあけてたくさん並んでいた。当たり前といえば当たり前なんだけど、ドラマなんかの結婚式のシーンでよく見る教会そっくりだった。

その人は前から二列目の長椅子の、一番左端に座っていた。白いカッターシャツの襟首と黒いセーターの背中が見える。

私は右側の通路をなるべく静かに歩きながら、礼拝堂内を見回した。赤、青、黄、緑の四色の長方形のガラスが規則的に配置された縦長のステンドグラス窓が、左右の壁に並んでいる。外に比べると少し薄暗くなった堂内に、窓のステンドグラスを通して光が差し込むのだ。焦げ茶色の長椅子も、よく磨かれてつやつやと光っている。美しい場所だ。

一番右側の列の、真ん中あたりの椅子に適当に座ってみた。背負っていたリュックサックを隣に置いて、深く腰掛ける。静かな空間。ゆっくり座っていたい場所だと感じた。

両腕を上げて、伸びをする。自然と天井が目に入る。屋根はアーチ状に高く作られていて、梁からはシックな黒っぽいシャンデリアがぶら下がっている。オレンジ色のやわらかい光が、神聖な場を守るようにともっていた。ここで賛美歌を歌ったりしたら、きっと素敵だろうと想像した。

あの男の人は、うつむき加減にじっと座っていた。男の人にしては少し長めの、大きくうねった髪が顔に半分くらいかかっていて、表情まではよく分からない。あの人はここへ何をしに来たんだろう。特にイベントもないみたいだし、神父とかそういう人もいない。休憩とか、考え事……。それとも誰かと待ち合わせ？　だいたいあの人、初めて見たときは神社にいたのに、今日は礼拝堂にいる。妙な人だな。

特に急ぎの用事もない私は、そのまましばらくその人の様子をうかがっていた。

ふいにその人は天井を仰いだ。眼鏡を外して傍らに置く。口元や頬のあたりを歪めたように見えた。それからまたうな垂れる。額に右手を当てる。目頭のあたりを指で触ったと思ったら、顔の右側を手のひらで覆う。鼻をすする音が聞こえた。

あれ、泣いてる……。なんで急に？　泣ける要素なんてあるかな。特に何が行われているということもない昼休みの礼拝堂に。午前中に辛いことでもあったのかな。

ハンカチで鼻と口を覆い、声を押し殺しているけれど、たびたび苦しそうな吐息がもれる。背中をかがめ、肩を上下させながら呼吸している。目元を拭う。鼻をこする。ついにはポケットティッシュを取り出して、鼻をかんだ。それから何分かしてやっと落ち着いたのか、深いため息をついた。眼鏡をかけ直し、荷物を抱えて立ち上がる。そこでその人は、ちらりと私を見た。

一瞬、驚いたように目を見開いて、一歩退いた。ぱっと背けた顔をクリアファイルで隠しながら、通路を足早に去っていく。悲痛な思いを人に悟られるのを、必死に隠そうとしている感じだった。まったくの、絶望。どうにもならない辛さ。大切な人を亡くしたときのような、何かそういう不幸があの人の身に降りかかって、独りで耐え忍んでいるみたいだった。

なんだかドキドキしてしまって、私まであの人みたいにうつむきながら礼拝堂を後にした。

「あれ、志保ちゃんやん」

わっ。びっくりした。なんか今日は心臓に悪いことばっかり起こる。

「梨子ちゃん」

「びっくりしすぎやろ。リアクションおかしいで。なんかあったん？」

「いや、別に」

秋本梨子ちゃんは、大学でできた、初めての友達。入学して初めて通学した日に、仲良くなった。バス停の時刻表や行き先表示の前でまごついている私を見かねて、声をかけてくれたのだ。福井にいたときはほとんど路線バスに乗ったことがなくて困っていたから、すごく助かった。

「次、授業やろ？　一緒に行こ」

うん、と答えて、並んで歩き始めた。同じ文学部国文学科の一年だということが分かってから、履修登録について相談したので、たいていの授業は梨子ちゃんと同じのを受けることになっている。

「次の授業って、日本文学概論Ⅰ、とかいうやつだよね」

「そうそう。シラバス見たら、古文の授業みたいやったで。和歌文学成立の歴史を学ぶことを通して……とかなんとか」

「うわ、私、古文は別に得意じゃなかったな」

「え、あたしけっこう得意やでー」

二人で話しながら歩くと、すぐ文学部棟にたどり着いた。講義室に入ると、梨子ちゃんは可動式の長机の上にトートバッグをどかっと置いて、トイレに行った。

さっきのあの人は結局、何者だったんだろう。頭の中にはまだ、あの人の苦しそうな顔がいつまでも残っている。

じっと動かないでその場にとどまっているのかと思ったら、唐突に帰っていった。人がいないところでゆっくりするのが好きなんだろうか。だとすると、私、邪魔しちゃったな。しかもあの人の邪魔したの、二回目だ。もしかして私のこと、記憶に残ってたりするかな。

絶対見ちゃいけないものを見ちゃった気がする。大人の男の人が泣いているのを生で見るのは、たぶん初めて。だからかな、妙に感動してしまった。普通、大人の男の人は涙を見せないものだと思っていたから。そういう人がかっこいい男の人だと思っていたから。でも、普通は泣かないものなのに泣くってことは、あの人にはそれくらいつらいことがあったってことだよね。何があったんだろう。気になる。あんまりつらそうだったから、自分には関係ないのに心配になってしまう。年上の人にこんなこと思うのは変かもしれないけど、そばで話を聞いてあげたい感じがした。

梨子ちゃんがトイレから戻ってきて数分後、チャイムが鳴った。その直後、講義室の前の方のドアが開いた。白いシャツの上に黒い薄手のセーターを着た、痩せ型の男性。

あれは。礼拝堂にいた、あの人だ。ゆっくりと教壇に上り、机の上に資料か何かの束を置いた。室内を見渡しながら声をかける。

「えー、この授業は『日本文学概論Ⅰ』となっております。お間違えの方はいらっしゃいませんでしょうか」

この人、先生だったんだ。しかも、国文学科の。

「はい、大丈夫なようですので、授業を始めます。これからこの授業を半年間担当いたします、老月です。よろしくお願いします。では、授業プリントを配りますので、一部ずつ取って後ろに回してください」

おいづき。聞いたことない名字だ。そして初めて会った時以来聞いた、老月先生、の声は、改めて聞くと優しく落ち着いた声だった。話し方も丁寧。あのときの「すみません」と同じ。

「えー、僕の専門の中古文学は、八世紀から十二世紀という広い時代をカバーしているのですが、小倉百人一首の詠まれた時代とだいたい一致します。中古文学と言われてもピンとこないという方は、小倉百人一首の時代と覚えてください。ちなみに小倉百人一首で僕が一番好きなのは、『玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする』という歌です。ご存知でしょうか」

先生は黒縁の眼鏡の位置を直しながら、話を続けた。

「玉の緒とは命のことで、その私の命よ、絶えてしまうのなら絶えてしまえと言いきっています。このまま生き長らえていると、この恋を堪え忍ぶ心が弱ってしまうと困るから、という意味です。作者の式子内親王は、小倉百人一首の撰者である藤原定家と恋愛関係にあったとも言われていますが……」

先生はここで少し間をとった。資料に目を落としながら、ため息交じりに呟く。

「……いいですよね。定家もこんな歌を贈ってもらえて。羨ましい限りです。……でも定家って、奥

さん二人もいて子どもも七人くらいいるんですよ。その裏で式子内親王と歌を交わすなんて、この時代の人間はどういう神経してるんでしょうね」
急に不機嫌そうな顔になった。なんか語気が荒い。
「皆目分かりませんね。生憎結婚したことがありませんので」
教室内にはフフッという笑いが起こっている。ていうか先生、独身なんだ。
「あの先生、私生活でなんかあったんかな」
隣の席に座っていた梨子ちゃんが、好奇心たっぷりの表情で話しかけてくる。
「確かに、そんな感じの言い方だったよね」
あんなとこ、見ちゃったしな。絶対なんかあったよね。
「……話が逸れましたね。えー、この歌は新古今和歌集の歌です。僕が今持っているのがその注釈書です。研究室から持ってきました」
分厚いハードカバーの本を机から持ち上げて、掲げて見せた。そんな手つきまでも、なんだか微笑ましく思えた。午後になって少し暑くなったのか、セーターとシャツの袖を肘まできちんとまくり上げていて、ほっそりした白い腕が見えている。それでも手首の関節の骨はしっかりと出っ張っていて、ああやっぱり男の人なんだと感じさせられる。
「新古今和歌集の注釈書は、大学図書館にも置いてありますので、是非探してみてください。ちなみに、注釈書というのは――」
すらすらと話しながら、授業を進めていく。本当に、大学の先生なんだなあ。最初に見たときは、

そんな感じが全然しなかったのに。ときおり微笑みながら、プリントに挙げた文献の箇所を紹介していく。ここのところがね、面白いんですよ、なんて。
でも先生、ついさっきまで泣いてませんでしたっけ。私、知ってるんですよ。
「ところで皆さんは、日本の古典文学の作品を、いくつ知っていますか。プリントの空いたスペースでいいので、思いつくだけ書き出してみてください。平安時代のものに限らなくていいですよ」
えっ、ちょっと待って。まず源氏物語と、枕草子でしょ。あと……中学高校時代に習った、竹取物語と、伊勢物語。それ以外、何かあったっけ。あっ、更科日記があった。それから日記といえば、紫式部日記っていうのもあったな。他は……ちょっと思い浮かばない。
ふと顔を上げると、ほかのみんなも静かに考えながら自分のプリントに書き出している最中だった。変なタイミングで顔を上げてしまったのがまずかったのか、老月先生がこっちに気づいた。
明らかに目が泳いでいる。あごに手を当てた。もう一度目が合う。先生はすぐに目をそらした。やっぱり顔を覚えられてたんだ。どうしよう。すごく気まずい。
「じゃあ、そろそろ、いいですか。十人ぐらい当てていきますよ」
あ、切り替えた。さすが先生。
「では……高山くん」
「はい。えっと……じゃあ、宇津保物語」
「お、そこからいきますか。なかなか渋いですね」
先生の顔がほころぶ。宇津保物語なんて思いつかなかった。あの人、詳しいな。さすが大学はレベ

ルの高い人が集まってる。
先生はそれからも、学生に文学作品の名前を答えさせていた。私のことは見なかったみたいに。
入学早々、先生の裏の一面を見てしまった。あの苦しそうな様子が頭から離れない。たぶん先生は早く忘れてほしいんだろうけど、私はもう絶対忘れられない。
このことは誰にも言わないって決めた。もし先生が泣いてたことを知ったら、面白おかしく周りに言いふらしてバカにする人もいるかもしれない。でも私は、老月先生には笑いものになってほしくないし、それにあのとき見た光景は私だけのものにしたくなった。

二

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ。穏やかな春の日だというのに、どうして桜は慌ただしく散ってしまうのだろうか。とはいえ慌ただしいのは桜ばかりではない。我が身もまた然り。
三月四月の年度替わりは何かと忙しく、ゆっくりと花見をしたり腰を据えて歌を詠んだりすることもままならない。
思い浮かぶのは有名な古歌ばかりだ。小倉百人一首で有名なこの紀友則の歌は、穏やかな春の情景を詠んだもので、散りゆく哀愁を感じさせるものの深刻さがないところがいい。深刻な和歌を思い出そうものなら、たちまち感傷的になってしまう。仮にも教育者がそんな状態ではいけない。今週は年度初めのガイダンスに出席していて時間を取られた。今はひとまず溜まった業務を遂行しなければならない。今期の授業はシラバス通りに進めることができるだろうか。今年のゼミ生の顔合わせの日程はいつにしようか。考えることは尽きない。
今はただ思ひ絶えなむとばかりを……いかんいかん。思ふともかれなむ人をいかがせむ……ああ、駄目だ。もはや職業病だ。和歌と己の精神との癒着が甚だしい。精神に業務を妨害される。
そうだ。こういうときはチャペルだ。チャペルはいい。
本学はキリスト教系大学で、学内に礼拝堂を設けている。僕は別にキリスト教の信者というわけではないが、よくここに来る。資料の束が挟まったファイルを小脇に抱えつつ、煉瓦造りの礼拝堂に、一人で入った。僕を除いて誰もいない。
やはり学生などはこういう場にはなかなか来ないか。彼らは礼拝の場に足を運ぶ理由を特に持たないのだ。もともとキリスト教徒ではないだろうし、たいていの日本人学生の実家は何らかの宗派に属する仏教徒であろう。かくいう僕もその例に漏れない。幼少期より、ことあるごとに様々な神社仏閣を参ってきたが、チャペルという場所に足を踏み入れたのは、この大学に奉職してからである。
けれど僕はチャペルという施設を、神社仏閣と同様に、自らの心を落ち着ける場として活用している。僕にとって宗教施設とはいわば精神の逃げ場なのだ。神や仏にならばどんな悩み事も隠すことなく打ち明けられる。

僕は椅子に座って両手の指を組んでいた。前列の椅子の背もたれに備え付けられた聖書をぼんやりと見つめる。色鮮やかなステンドグラスを通して入ってくる、柔らかな陽光を浴びていた。職場にいながらにして日常を忘れさせるようなひとときが訪れた。

ふいに、涙が流れる。何だろう、この気持ちは。

また新入生が入ってきた。僕から見れば、みな一様に楽しそうな表情を浮かべている。長い努力の結果、大学に合格し、新生活を始めたばかりなのだから当然だ。夢に向かって努力し、瞳を輝かせているような、充実した大学生活を送る学生らを見るにつけ、暗い気分に襲われる。気だるげに授業に出てくる学生を見るほうが、むしろ安心感すら覚える。

今の僕に、夢や希望はない。希望を胸に前進する、そういう向上心を失ってしまったようだ。こんな僕が教員でいいのだろうか。こんな人間でいいのだろうか。情けない。大の大人が、簡単に泣くなんて。

僕が全て悪い。学問を修める場でいらぬ考え事をする僕が悪い。悪かった。ご迷惑をおかけして申し訳なかった。本当は直接謝りたいくらいだが、今となっては面と向かって話せる気がしない。

どうしてこんなに簡単に涙が出てくるのか僕だって分からない。こんなことで、と思うかもしれない。男が簡単に泣くもんじゃない、と思うかもしれない。でも僕は「男らしく」なんて言葉は大嫌いだ。男らしく、なんて言った時点で、そいつは僕を男失格だと決めつけて批判しているんだ。大きなお世話だ。泣いたっていいじゃないか。僕だって人に迷惑を掛けまいとして、場所を選んでいるんだ。泣かずに済むならどれほど気が楽だろうか。

こういうときは山上憶良の万葉歌が心に刺さる。世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば。こんなにつらいなら、いっそ鳥にでもなってしまいたい。けれど飛んでいくことはできないのだ。

焦がれたものに裏切られては、また絶望の淵に叩きのめされる。そんなことの繰り返しで、日々は過ぎてゆくのだから。

僕に翼はないのだ。

三

教室の外は雨だ。机の下でちょっと足を動かすと、防水のブーツが床とこすれてキュッと音を立てた。ここ数日雨が続いていて、洗濯物が乾きにくいので困る。また部屋干しか。

「はい、じゃあ、白崎さん」

老月先生の顔がこちらを向く。隣の席に座っている梨子ちゃんも、ちらっとこっちを見る。

え、待って。やばいやばいやばい。聞いてなかった。でも聞いてないとは言えない。

「……すいません、分かりません」

先生は手元の受講者名簿に目を落とす。

「あ、そうですか。では杉浦さん」
先生、何聞いてたの。なんで急に当ててきたの、先生。
「本歌取り」
「そうです、本歌取りです」
あー。本歌取りは分かったのに。先生違うんです、ちょっとボーッとしてただけなんです。ごめんなさい。あーもう。悔しい。
「三つ目の項目の、右の歌が本歌で、左が本歌取りした方です。こうした手法は、平安末期、まあ今でいうところの盗作だとして批判されたこともあったんですが、御子左家の藤原俊成が評価したことで受け入れられていったようです。御子左家、というのはそこのプリント左下をご覧ください。藤原北家の流れを汲んでいて、藤原道長の――」
先生は右手でプリントを押さえながら、左手で髪をちょっと触る。湿気で髪の毛の調子が悪いんだろうか。いつもよりもっさりした感じになっている。でもそういう先生もなんかいい。可愛い。
授業が終わって、先生は教室を出ていった。隣では梨子ちゃんが立ち上がって、ペンケースやファイルをカバンにしまっている。
「ねえ、先輩に聞いたんやけどさ、先輩らって、けっこう先生方の研究室行って、おしゃべりとかしてるみたいやで」
「え、そうなんだ」
「うん。志保ちゃん、もしこのあと予定無かったらさ、リーチ先生の研究室、行ってみいひん？」

誰それ。聞いたことない。
「リーチ先生って？」
「ほら、今の。老月先生」
「え、老月先生、そんな呼ばれ方してんの」
「バド部の国文の先輩らがみんなそう呼んではるから」
ああ、梨子ちゃん、バドミントン部だったもんね。
「そうなんだ。面白いあだ名」
「なあ、行ってみよ、研究室」
「うん。いいよ」
「おーし！」
梨子ちゃんは勢いよく教室の扉を開けた。行けるんだ。そんな気軽に行くものなの、研究室って。でも興味ある。老月先生の研究室。どんな感じなんだろう。

コンコンコンッ。梨子ちゃんが扉をノックすると向こうから、はい、と声が返ってきた。
「失礼しまーす！」
梨子ちゃんと二人で老月先生の研究室に足を踏み入れる。天井まで届きそうな書棚が壁に沿って並

んでいて、本の多さに圧倒される。いいなあ、こんなにたくさんの本に囲まれた生活。憧れる。
「おや、こんにちは」
研究室の奥のパーテーションの向こうから、先生がひょこっと顔を出した。
「今来ても、大丈夫でしたか」
私が尋ねると、ええ、と言いながら、入り口近くの事務机とパイプ椅子を手で示した。
「どうぞ、おかけください」
梨子ちゃんと私が入り口の扉を背にして座ると、先生もその向かい側の椅子に腰かけた。
「何か、質問でしょうか」
「あ、いや、質問ってわけじゃないんですけど……。先生の研究室ってどんな感じなんかなーと思って」
先生は柔らかく微笑んだ。目尻に少ししわができる。
「構いませんよ。今日は特に忙しくはありませんしね。それに、積極的にコミュニケーションを取りに行こうという姿勢は、素晴らしいと思いますよ。……僕は苦手ですから」
確かに先生はあんまり積極的じゃなさそう。小さく笑いながら左隣を見ると、梨子ちゃんは思い出したように口を開いた。
「そういや先生、老月先生って、なんでリーチ先生って呼ばれてはるんですかー？」
「と、唐突ですね」
先生が苦笑いしている。すごいな。梨子ちゃん、直接聞くんだ。けど、ナイス。それ実は私も気になってた。

「先輩の一人に聞いてみたら、なんでやったっけ、忘れた、みたいになってうやむやにされたんで」
「うーん。僕の口から言うのも変な話なんですけどね。僕の名前、利一（としかず）っていうんですが、何年か前の国文科の学生が、横光利一と同じだ、と言い出したのが発端らしいんですよ」
りいち。うん。呼びやすい。呼びやすい名前のほうが楽だしね。
「気が付いたらいつの間にか定着したようで、『リーチ先生』という単語を学内でしばしば耳にするようになって。しかもそういうときはたいてい僕の言動を揶揄しています」
揶揄って……。先生ってそんなにからかわれてるの？　いや、からかわれてそうだけど。それにしたってちょっと先生の被害妄想も交じってるような。
「でも、それやったら先生って、結構人気あるんですね」
「いやー、なめられているといった方が近いのでは」
「嫌われるよりよっぽどええやないですかー」
それは、私もそう思う。先生の場合は、好かれてるから話題にされやすいんだ。
「そういうふうに考えたいものですね。まあ、たとえ直接あだ名で呼ばれても僕はわざわざ注意しませんしね。……ああ、そういうところか。揶揄される原因は」
黒縁の眼鏡を両手でちょっと持ち上げて、かけ直す。先生がちらっとこちらに視線を投げかける。
「僕の話なんかは、まあどうでもいいんです。それより、秋本さんも白崎さんも、大学生活にはもう慣れましたか」
「んー、まあまあです。授業の時間が長くなったのがちょっと大変やな、と思ったくらいですね」

「九十分ありますからね。僕も授業をしていると、疲れたな、と思うこともありますよ。立ちっぱなしで話してますから。……僕ももう若くはないということですね」
え、まだ若く見えるけどな。先生、いくつなの。あ、先生、そんな遠くを見るような顔しないで。
「あ、いえ、そんなことより白崎さんはどうですか」
「そうですね、私は……。空き時間が多いので、授業と授業の間、何しようかなっていっつも迷っちゃいますね」
「時間の使い方が難しいですよね。友人と話すのも良し、課題を進めるのも良し、図書館で読書に勤しむのも良しです。今日のお二人みたいに、先生方の研究室を訪ねてみるのもいいと思いますよ。何か新しい発見があるかもしれません」
そっか。先生の研究室に来るっていうのは、いいな。授業を聞いているだけでは分からなかったことが分かる場所、なのかもしれない。
帰り道、コンクリートのへこみに溜まった雨水をぱしゃっ、と踏みつける。黄色いドット柄のビニール傘に、ぱらぱらと雨粒が当たる音。
リーチ先生、か。やっぱり呼びやすいな。私もこれからそう呼んでみようかな。先生には聞こえないところで。
また行こう。今度は一人で。

四

ある冬の日のことだった。僕は芳学館の一階の飲食スペースの椅子に腰かけていた。芳学館とは、学生の飲食や勉強などに自由に使える施設である。試験前になると仲間同士で試験対策に励む学生も多く見られるのだが、その日はひとけもまばらだった。
僕は教員であるので、休憩は研究室でとればよく、学生が多い場合には遠慮してここは使わないことにしている。ただ、単に時間的なものではなく、空間的な息抜きも必要だ。研究職は職業柄室内に籠りがちになる。
研究が思うように捗らない。研究室に居たくなくなるほど、そのときの僕は行き詰まっていた。乱雑に棚刺しになっている研究資料の数々を今だけでも見たくないがために、一時避難してきたのだ。僕は何をするでもなく芳学館の隅の椅子でうなだれていた。
「お疲れ様です、老月先生。休憩中ですか」
感じのいい女性の声が聞こえた。そのときの僕には、まるで女神が降臨したかのように見えた。高級そうな白いコートに身を包み、つやつやとした黒のハイヒールが自信に満ちていた。
彼女は今年度からこの大学でフランス文学の教員を務めている、椎野千代子（しいのちよこ）先生だ。色白で鼻筋の通った顔に、うるんだような黒い瞳と真紅の口紅が映える、華のある女性だ。その外見と専門分野から、着任してすぐ、「マダム千代子」と呼ばれ出したとゼミ生らが話しているのを聞いたことがある。椎野先生の研究室の前を通ると、学生らの明るい笑い声がしばしば聞こえてくる。会議の後などはよ

く話しかけられているところを目にするので、先生方からも人気があるようだ。彼女はいつも人に囲まれていた。僕のような者が「彼女」などという呼称を用いることすらおこがましく感じる。僕は椎野先生を遠巻きに眺めるばかりで、自分から話しかけたことはなかった。

その椎野先生のほうから話しかけられたのだ。僕はひどく狼狽した。

「ええ……まあ、そんなところです」

「よろしかったら、肉まん、召し上がりませんか」

「え、肉まん……ですか」

僕は少々面食らった。

「ええ。今、買ってきたところなんですよ。ちょうど良かった、と思って」

「では……あっ、どうぞ、座ってください」

僕が手で促すと、椎野先生は僕の向かいに腰かけた。襟元に白いファーのついたコートを、椅子の背もたれに掛ける。プラスチック板と金属のパイプでできている安っぽい椅子が、それだけはサロンか何かに置いてあるような高級感を放ち始めた。

住む世界が違う、という感じを受ける。年齢は僕よりお若いが、優秀な先生だからきっとその道では今後のご活躍が期待されていることだろう。有名な女子大学を卒業して、フランスへも何年か留学しておられたという。その経歴や身なり、振る舞いから察するに、富山の田舎のサラリーマン家庭で育った僕とは育ちが違うのだろうと何となく感じていた。

そんな椎野先生が、学内のコンビニで購入したと思しき肉まんを僕に差し出している。とても意外なことに思えた。

「肉まんと、ピザまん、どちらがよろしいですか」

小さなレジ袋から、肉まんとピザまんを一つずつ取り出す。

「え、いえ、僕は」

「そうおっしゃらず」

「あ……では、肉まんの方をいただきます」

「どうぞ」

こういうとき、僕はどういう態度を取ればいいのか分からない。遠慮すればいいのか、初めから素直に選べばいいのか。まどろっこしい押し問答は好きではないが遠慮のない人間だと思われるのも避けたい。コーヒーと紅茶のどちらがいいかと出先でよく聞かれるが、僕はあの手の質問をされるのが苦手だ。言われてしまったが最後、楽な気分での滞在はできなくなる。

「すみません」

熱い肉まんを両手で受け取る。熱が指先へと伝わってきた。こまめに持ち替え、熱さを逃がしながら椎野先生を見やる。

テーブルに肘をつき、両手でピザまんを支えるようにして持ちながら、美味しそうにほおばった。紅い唇が動く。幸せそうに、笑顔を浮かべた。

「私コンビニの肉まん大好きなんです」

「あ、では僕はピザまんを選んだ方がよかったですね」

「いえ、そういう意味じゃないんです、ごめんなさい！　ピザまんも肉まんも、どっちも大好きですよ」
片手で口元を隠しながら笑う。ホッとした。選択を間違えたわけではなかったようだ。しかし椎野先生のような方と他愛無い話をし、肉まんまで頂いてしまっていることに少々戸惑っていた。何だか申し訳ない。人の目も気になる。しかしそんなことは言えない。
「コンビニの肉まんって、寒くなってくると無性に食べたくなりません？」
「ああ、分かります」
変な言い方だが、椎野先生がコンビニで肉まんを買うような人だとは思っていなかった。
「老月先生も、肉まん、お好きですか」
「ええ、好きです」
それは本当に意外だった。椎野先生は肉まんが好きなのだ。こんなことを知っても何にもならないが、世間一般の人々もほとんど当てはまることだとは思うが、それでも共通点を発見した。それだけで、人は他人を見る目を変えていく。人間関係とはそういうことの連続でできているのかもしれないと思った。
それからもしばらく話は続いた。
「老月先生は、今日はもうお仕事はよろしいんですか」
「あ……では、そろそろ僕は研究室に戻ります」
「そうですか。また一緒に肉まんでも食べましょう」

椎野先生の茶色い巻き髪が、立ち上がったときに揺れた。花のような芳しい香りがする。
「ええ、是非。それでは」
まるで以前から親しかったかのような雰囲気で別れの挨拶をした。そういう雰囲気を作ってくれていたのだ。白いコートを羽織って歩いてゆく後ろ姿は、もういつものマダム千代子に戻っていた。それでも何か、いつもと違う気持ちでその姿を眺めた。椎野先生は陰気な僕にも気軽に話しかけてくれる方なのだということを知った。
この日を境に、椎野先生に対する印象は、明らかに変わっていった。

椎野先生に惹かれていくのに時間はかからなかった。学内で椎野先生を見かけると、僕も他の先生方や学生らのように自ら話しかけに行った。楽しかったフランスの思い出、生まれたばかりの甥のちょっとした事件、お気に入りのワイン。いろいろな話を聞かせていただいた。他の人が椎野先生に話しかけに来たときは、ご迷惑にならないようすぐに退散していたが、決まって「あら、もう行かれるんですか」と言ってくださった。
春は花壇のパンジーを写真に収め、夏はノースリーブのワンピースで学内を闊歩し、秋は紅葉した落葉樹のそばのベンチで読書を楽しみ、冬は肉まんを頬張る。そんな椎野先生の姿を見るたび、僕の心は喜びで満たされた。マダム然とした気高さと少女のような朗らかな親しみやすさとが並び立って

いるのだ。
あれやこれやと尽きることなく湧いてくる悩みのほとんど全てが恋愛がらみになり、そのほかは頭の隅へと打ちやられた。いつだって、悩み事が全く無くなるようなことはない。しかし恋に煩う間は悩みの種がたった一つに集約できる。従って相対的に幸せになれた。
椎野先生の方から話しかけてくださることもあった。なかなかうまくいかないことが多くて、などとつい愚痴を言って甘えてしまう僕に、椎野先生はフランスの諺を優しく囁いてくれた。
「Impossible n'est pas français. フランス語に『不可能』はありません」
「Après la pluie, le beau temps. 雨の後には、きっと良い日が訪れますよ」
疲れている僕のために教えてくれた、美しい言葉。あのときの声を幾度も反芻しては熱いため息をつく。
チャペルにも何度も足を運んだ。煌びやかなステンドグラス。ぼんやりと光を湛えたシャンデリア。僕はここで、祈りをささげる。努めて静かに。密やかに。たとえそれが煩悩に極めて近いものだとしても、神はお許しくださるはずだ。僕の心が、清いものならば。僕が彼女に向ける感情の百分の一でいい、僕にも少しばかりその心を向けてほしい。神よ、どうか僕にご加護を奉りたまえ。そうして、信者でもないのに神頼みに明け暮れる日々が続いた。
一年が経つころには、自作の短歌を五首も六首も書き綴ったメモ書きが、机の引き出しからたびたび見つかるようになっていた。自分でもその無意識的行動に驚いているくらいだったが、どうにもできない。それらの恋歌をまた眺めては、ここは語順を変えた方が全体の流れがすっきりするのではないか、この助詞はやめた方がいいかもしれない、などと推敲を重ねた。筆ペンを取り出して字の練習もやった。学生時代に何年か書道教室に通っていたことを思い出す。ここは行書だと書き順が違う、この字は点画が省略されてこうなる、といった筆運びを何度も繰り返す。
そうやって手を動かしているとフラストレーションが解消できる気がした。なぜかそうしなければ気が済まないような夜がたびたびあり、遅くまで研究室に残っていてなかなか帰らないことが増えていた。
これでは仕事にならない。限りもなく悶々として苦しみを味わい続けるべきかは。

三寒四温の時候であった。春休み中の学内は学生が減り、また教員も授業がないため、ゆっくりと話せるはずだ。年度替わりで忙しくなる前が良かろう。そう思って連絡すると、椎野先生はいつものように快く研究室に呼んでくださった。
「……えっと。今日は、どうされたんですか」
入り口で突っ立ったまま黙りこくっている僕を見て、椎野先生は困ったように首を傾げた。
椎野先生の研究室は、飾り気のない僕の研究室とは大違いなのだ。書棚の一段一段には統一感のある暖色系の布が敷かれてあり、その上にハードカバーの洋書がずらりと並ぶ。ティーセットが収められた戸棚の上には洋風の人形や小物などが飾られている。

何度訪れても、自分だけがその空間に溶け込めず、落ち着かない。椎野先生がいつも焚いているアロマの芳香は、リラックス効果をもたらすはずがかえって僕を緊張させた。言うはずだった台詞は頭のどこにも残っていない。短冊状に切った和紙を取り出し、これを、と言って差し出すことしかできなかった。

筆文字で書かれたそれを、椎野先生は不思議そうにしばらく見つめた。

「ごめんなさい、私、専門ではないのでよく分からないのですが……。これはもしかして、恋の歌ですか？」

「はい」

少し微笑み、口ごもってから、椎野先生はこう言った。

「噂が広まるのって、すごく早いなあって思うんです。ひと月もしたら、他の学部の先生方までご存じでいらしたくらい」

突然、何の話だ。何が言いたいのかよく分からない。

「老月先生は、噂話などはあまりされない方だから、ご存じなかったかもしれないんですが、実は私、少し前から時任先生とお付き合いしているんです」

「え……学部長と」

「ええ。ですから、こういうのはちょっと」

曖昧に笑うその表情には、明らかに迷惑そうな感じが漂っていた。諦めろと言わんばかりの強力な微笑みに気圧される。

「ほんの、半年ほど前からなんですけれどね。とても熱心なご様子だったので、私も何だか惹かれてしまって。時任先生、素敵なお店をたくさんご存知だし、ああ見えて、とっても男らしいところ、あるんですよ」

そんな話は聞きたくなかった。耐えきれなくなって、僕は椎野先生の研究室を出た。なんと言ってそこを退散したのかは、覚えていない。

その日は自宅に逃げ帰り、それから一歩も外に出なかった。食事も摂らずに布団にくるまって過ごし、泣き疲れていつの間にか眠り、重たい闇に閉ざされた夜が白々と明ける頃、ぐったりと横たわったまま目を覚ました。

浅はかだった。僕が彼女に好かれるはずなどなかった。至極当然である。彼女のような美しい人に惚れる男など世の中のどこにでもいよう。彼女にとっては僕など、どこにでもいる人間のひとりに過ぎない。所詮、僕ごときが、彼女に選ばれるはずがなかったのだ。

憂鬱な気分で新年度を迎えた。僕にとって椎野先生は今もっとも会いたくない人物となっていた。もう椎野先生の美しいお顔を直接拝見することはできない。気まずさと申し訳なさがどうしても拭えない。そんなに簡単に割り切れるものではない。こんなことなら気持ちを告げるべきではなかった。恥と悔しさと自分への怒りがないまぜになって、後悔が訪れる。そして、僕を蝕んでいく。

研究室へ帰る途中で、廊下の向こうから、今二番目に会いたくない人物がやって来るのが見えた。学部長である。
「お疲れ様です」
「ああ、老月先生、お疲れ様です。……先生があんなことする人だとは思わなかったなー。老月先生も隅に置けませんね」
擦れ違いざまに、わざと大きめの声で学部長が言った。会釈してすぐ立ち去ろうと思っていたのに。面倒なことになった。
「椎野先生から聞きましたよ。口説いたらしいじゃないですか」
この人の人を見下すようなへらへらとした笑い方は、いつも僕の神経を逆撫でする。
「……申し訳ありません。時任先生とそういう関係でいらしたとは存じ上げませんでした」
「なーんか、千代子困ってましたよ。そんなつもりじゃなかったのに、って」
「……すみませんでしたとお伝えください」
「分かりましたから、もう頭を上げてくださいよ。その腰の低さ、逆に尊敬しますけどね」
くるりと向きを変えて、学部長は立ち去っていく。縦縞のスーツの背中が起こした風は、花のような香りがした。椎野先生がいつも研究室で焚いているアロマの香り。ということはついさっきまで椎野先生の研究室に……。
五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。古今和歌集の和歌を思い出して、得も言われぬ苦しさを覚えた。昔の人、などと呼べる関係に至るにはまったく及ばなかったというのに。他の人には何でもない、むしろ心地良さすら感じるであろうこの香りに、おそらく僕一人だけが、こんなにも苦しんでいるのだろう。
整髪料で整えられた白髪交じりの頭が見えなくなっても、僕はその場に立ち尽くしていた。
椎野先生も椎野先生だ。僕のことを口の軽いあの人に喋るなんて。どこにどう噂が流れているか分かったものじゃない。とんだ恥さらしだ。これまで以上に僕は生きにくくなった。
だいいち、何故よりによって学部長なのだ。どこが良くて付き合ってるんだ。僕にはいつも嫌味な言い方をするくせに。若い女性ばかり贔屓する差別主義者め。それにあの人はもう五十代だぞ。椎野先生とは二回り近く離れているじゃないか。
昼間はやけ酒をするわけにもいかない。それで今日も僕は、チャペルへと向かう。

五

授業開始十分前に、私と梨子ちゃんは教室に着いた。私が机に荷物を置くと、梨子ちゃんが笑いながら言った。
「なんか志保ちゃんて、ホンマにリーチ先生好きやんな」
「えっ」

ちょっと、大きい声で言わないで。そういうの困る。ていうか私って、そんなに分かりやすいの？顔に出てるの？

「いやだってリーチ先生の授業だけいっつも前の方に座るやん」

「いや、まあ……ちゃんと聞きたいし」

「リーチ先生、面白いもんな。説明も分かりやすいし」

良かった。からかわれるかと思った。恋愛のことでからかわれるの、苦手なんだよね。

「けどそんだけ熱心なんやったら、三年から始まるゼミ、リーチ先生のとこ入るん？」

「え、まだあんまり考えてなかったな。でもそれ、いいかも」

「うん。リーチ先生ええよな。あたしもリーチ先生にしよっかなー」

ゼミか。ゼミに入れば、もっと先生と話せる。いいなあ。

リーチ先生が静かに教室に入ってきて、授業が始まる。いつもと同じ、もじゃっとした髪に、黒縁の眼鏡。水色のチェックシャツが涼し気だ。冷房のよく効いた教室で、今日もリーチ先生の授業を受ける。

「皆さんは、『伊勢物語』がどうして『伊勢物語』と呼ばれるようになったのか、考えたことはありますか。『伊勢物語』は皆さんもご存じのように、在原業平の歌や逸話をもとに作られた歌物語ですよね。だとしたら、在原物語、とかでも良かったと思いませんか」

先生は教壇から学生たちに目を配りながら問いかけた。

「例えば『源氏物語』や『平中物語』がそうです。主人公の名前がタイトルになっています。業平は、在五とか、在五中将、在中将といった呼び名があるので、実際、『源氏物語』の総角には『伊勢物語』のことを在五が物語、と呼んでいる箇所があります。なのになぜ、『伊勢物語』という名前で定着し、現在にまで伝わっているのか。様々な議論が展開されてはいますが、まず間違いなく取り上げなければならないのが、狩の使の段です。一ページの真ん中あたり、六十九、と書いてあるところをご覧ください。むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使に行きけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の――」

リーチ先生はすらすらと本文を読み上げていく。先生ってやっぱすごいな。読み慣れてるって感じ。自然な抑揚がすごく聞きやすくて、本文を目で追うのをつい忘れてしまいそう。

「斎宮に選ばれた女性は、男性と関係を持つことはご法度。そんな身の上の女性と恋に落ちたこの男は、一度は部屋へ連れて入るものの、まだ打ち解けて深い話もできないうちに女が帰ってしまうんですね。翌朝、女から、君や来しわれや行きけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか、あなたが来たのか私が行ったのか分からない、夢なのかそれとも目覚めていたのか、と歌を送ってきます。男も感じ入って、かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ、悲しみで真っ暗になった私の心も、乱れてしまって分別もつきません、夢かうつつかは今晩来て決めてください、と返歌を送ります」

先生の口から恋の歌を聞くのは、なんかドキドキする。先生も、恋愛感情を持つことはあるんですか。

「この話は、結局会うことは叶わないままになってしまうんですが、歌物語はこういう話、多いです」

先生は伏し目がちになって、独り言のように話を続ける。先生の声は小さかったけれど、教室内が

静かだったから教室の前の方に座っている私にはよく聞こえた。
「思い通りにいかない、切ない関係ではあるんですが、多くを語ることなく、歌でお互いの気持ちを確かめ合うような感じが……いいですよね」
先生の「いいですよね」っていう感嘆の言葉、好きです。思わずうなずいてしまいます。
「今だったらメールでもなんでも使って連絡が取れますが、昔は手紙を書くしかありませんから、そんなスピード感はありません。その手紙だって人に渡して届けてもらうとなると、本当に相手に届いているのか確認も難しく、不確かで、じれったいものだったでしょう。しかし、だからこそ心が通じ合った時の喜びはひとしおだったのではないでしょうか。こういう歌のやり取りの詳細を想像するのが、平安文学を読むときの醍醐味だと僕は思いますね」
口調は優しい。けれど熱く語っている。やっぱり先生は、自分の専門分野の話をするときが一番輝いて見える。授業の内容からは外れてしまっても、面白い。先生は本当に和歌が好きなんだなあと思う。
「さて、この段は『伊勢物語』の中でも重要視される段で、この段が本来の『伊勢物語』の冒頭だったのではないか、という説も――」
正直言って私は高校時代、古文はあんまり得意じゃなかったし、先生の話すこともあんまりよく分かってない。最近は先生のことばっかり考えている。授業の内容よりもリーチ先生のことを観察するのに躍起になっている。他の先生の授業でも、リーチ先生ならこういう文章はこう読むだろうな、リーチ先生は今研究室にいるのかな、とかそういうことをつい考えてしまう。ダメだな、真面目にやらないと。

別に成績は単位が取れればいいんだけど、リーチ先生に出来の悪い学生と思われたくない。
……もっと言えば褒められたい。やっぱりちゃんと勉強しなきゃ。

私はリーチ先生の研究室をしばしば訪れるようになった。授業の内容を個別に質問するという名目で訪れることが多かった。
「先生って、クリスチャンなんですか。ときどき、チャペルに行かれてるみたいですけど」
「いえ、別に特定の宗教を信仰しているわけではないんですよ。ああいう、静かで神聖な場所が好きなだけです」
二人でそんな会話をしたこともある。
「ここの近くの、梨木神社という小さい神社があるんですが、あそこは結婚式なんかやっているとき以外は人も少ないので、過ごしやすいですよ」
「梨木神社。一回行ったことあります」
「そうですか。今度行く機会があれば、その隣の盧山寺（ろざんじ）にも足を延ばすことをお勧めします。紫式部が源氏物語を執筆していたときの邸宅の場所が、今の盧山寺の境内にあたるそうですから」
もちろん、すぐに行ってみた。盧山寺の源氏庭は、紫色の桔梗があちこちに植えられていてとても美しかった。確かに、リーチ先生の好きそうな場所だ。

神も仏もまるごと敬っている感じが、リーチ先生らしいと思った。

チャペルに行く先生を見かけることがたびたびあって、そのときは、先生今何を考えているんですか、って思いながら遠くから見つめる。追いかけたりはしないで、その場を通り過ぎるだけ。もう先生の邪魔はしたくないから。先生がひとりになりたいときは、ひとりにしてあげたい。またあのときの苦しそうな先生の姿を思い出してしまって、あちこちから聞こえてきているはずの蝉の声は遠くなっていく。

何度会いに行っても、直接聞くことはできない。先生はどうして泣くのか。まだ苦しんでいるのか。もう泣かないでほしい。でももし、また先生が涙を流すようなことがあれば、そのときは私が隣にいてあげたい。私に何ができるというわけではないのだけれども。こんな気持ちになるのは本当に変だと思うけど、私まで胸が苦しくなる。この気持ちを伝えたい。

もちろん誰にも言えない。変な噂が広まったりしたら、先生にも迷惑がかかる。たとえ私が良くても、先生には迷惑をかけたくない。大学の先生と学生っていう立場は、絶対にわきまえなくちゃいけない。

その上で、もう少しだけ距離を縮めることが出来たら。報われなくていい。ただ伝えたい。私のことを少しでも意識してもらうための、他の学生と同じだと思われないような、何かを。

六

大学時代の友人、守山が結婚した。大阪で高校教師をしている彼は、同じ学校に勤める年下の先生と出会い、二年の交際を経て結婚に至った。結婚式で見た守山は、新婦と顔を見合わせて幸せそうに笑っていた。昔に比べるとふっくらとした体型になっている。おめでとう、と声をかけると、いやあ、俺もついに結婚したよ、と目尻を下げた。老月は准教授になったんだって？　すごいなあ。立派だなあ。昔っから研究熱心だったもんなあ。朗らかな表情でそんなことを言ってくれた。

立派なのは肩書きだけだ。中身は何も変わっていない。学生時代、課題の提出期限に間に合わないと愚痴ばかりこぼしていた君が、高校教員になる夢を叶え、教育現場の激務に耐え、素敵な奥さんをもらい、教え子や同僚の笑顔に囲まれて盛大な結婚式を開くまでになったんだ。君の方が余程立派だよ、守山。

出席者の多くは守山の学校関係者で、僕の知り合いはそれほど多くないので、土曜の早い時間帯の式だったが予め二次会は断っていた。人の多い賑やかな場所は性に合わない。

帰りはどこにも立ち寄ることなく駅の改札を通り、京都方面へ向かう阪急電車に乗り込んだ。横長のシートに座り、両脚の間に荷物を置く。久々に着た黒のスーツは少しばかり窮屈に感じた。もしかすると僕も太ったのかもしれない。

この年になると、知り合いの結婚報告を聞いても他人事として聞き流せるようになった。久々の再会で、ここぞとばかりに「いい相手はいないのか」と聞いてくる者もあるが、正直なところなるべく

回答を差し控えたいと思っている。「いやあ、僕は」などと、いつも曖昧に濁すばかりだ。

自宅と大学の往復をこのまま何十年も続けるのだろうか。ああ、いっそ出家できれば。この時代に出家という制度があれば、すぐにでも出家するのだが。やはり平安時代に生まれていればよかった。何もかもこの時代のせいだ。憲法までが勤労の義務を唱えている。職場で生きづらさを抱えた人間に、救いはないのだろうか。

現世に救いがなければ来世でということになるのか。平安時代の貴族たちの多くも、現世は辛くともせめて来世はと願ったからこそ、俗世間への未練を絶って出家したのだ。

しかしそもそも人間が死んだらどうなるのかなど、誰にも分かるまい。もし生まれ変わりというものがあるとしても、生まれ変わった後の魂には今の僕の記憶を引き継げない。今の僕が前世の記憶を引き継いでいないのだから。死んで記憶が消去されるとその時点で僕ではなくなってしまう。それ以降、僕は完全に存在しなくなるのだ。

だとするとやはり現世での救いを願わねばならない。

そんなふうにして、烏丸に到着するまでの間、考えても仕方のないようなことばかり考え続けていた。地下鉄に乗り換え、大学近くの駅で降りる。

荷物も多く、慣れない場にいたことによる気疲れもあったが、直接家には帰らず一度研究室に寄ることにした。メールチェックなど諸々の事務作業を片付けるためだ。

ベンチと植木の並ぶ学内を通り抜け、チャペルの前を過ぎて、文学部棟に辿り着いた。いつもなら何ということもない道も、重い荷物を持ちながらだと妙に長く感じる。今日はエレベーターを使って

三階に上がった。研究室前の廊下に設置してあるポストを確認する。

おや。何だこれは。一筆箋が一枚、入っている。桃色の花の絵が左下にあしらわれた一筆箋。流麗な筆文字で書いてある。

しのぶれど色に出にけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで

白崎志保

はて。これはどういうことであろう。

右側の空白部分には、「研究室にいらっしゃらないようだったのでポストに入れました」と縦に一行、鉛筆書きで小さく書かれている。僕は昨日早めに帰宅してしまったので、そのあとに訪ねてきたのか。しまった。研究室に残っていればよかった。そうすれば真意を本人の口から聞けたのに。

一筆箋と荷物を手に、研究室に入る。テーブルの上にどさりと荷物だけ置いて、奥の作業机に向かった。肘掛けのついた事務椅子にもたれ、ゆっくりと息を吐く。

それにしても突然の手紙とは、いささか心躍るものがある。まるで重苦しい雲が漂う空に、ふっと光が差し込むような。そんな温かな心持ちになる。光栄なことではないか。和歌（うた）なんて贈られたのは、初めてだ。

しかも、字がいい。「し」や「り」といった文字はすっと細く、「恋」や「思」の部首「こころ」はダイナミックに動きながら繋がっている。今時、筆を使って文字を書く人は珍しいから、なおさら目を奪われる。手紙というより、作品だ。これは良いものを頂いた。

ふむ。とはいえ、だ。問題はこの文（ふみ）の意味するところである。平兼盛の和歌。確か拾遺和歌集の恋歌だったはずだ。恋煩いかと尋ねられるほどに、忍ぶ恋心が顔色に出てしまっていた、という、時代を超えて共感性の高い歌である。

裏も表も確認したがこの一筆箋には宛名がない。とすると、僕宛てではない可能性もある。本当は別の先生に渡したかったが、間違えて僕のポストに入れてしまった。焦っていた場合そういうこともあるかもしれない。

だが、僕宛てだった場合、どうすべきか。

空調の音だけが聞こえている静かな研究室の中、天井を見つめたり、書棚に並んだ本を眺めたりした。肘掛けに両腕を置いたり、腕を組んだりした。貧乏ゆすりをしてみたり、脚を組んだり、組み替えたりしてみた。いつの間にか外は夕闇に包まれ始めていた。

白崎さんが授業内容の質問に来ることがこれまでに何度もあったこと。忍ぶ恋の歌を頂いたということ。僕が和歌の研究者であること。研究者であると同時に、白崎さんにとって僕は先生であるということ。

これらを踏まえ、ひとまず結論を出した。

白崎さんは、恋に悩んでいる。しかし、友人に話すと瞬く間に噂が広まってしまう恐れがある。

「ものやおもふ」と問うてくるような友人がいるならなおさらだ。そこで、普段から授業について質問しに行っている教員に目を付けた。そういう教員ならば相談もしやすく、簡単に秘密を口外することはないであろう。そしてその条件にあてはまる教員が、たまたま僕だったのだ。しかし唐突に恋愛相談をすることは恥じらいが勝ってしまって難しい。相手にそれとなく察してもらえれば楽だ。話をどう切り出そうか迷った挙句、文字に書き起こして読んでもらおうと考えた。こうすれば教員と学生の立場であっても、教員の側から恋愛事情を尋ねてもらいやすい。しかも僕は和歌の専門家だ。和歌を見るやその真意をうまくくみ取ってくれるはずだと期待した。故に、兼盛の和歌を選んだのだ。

僕はそう考えて、「先生」として真摯な対応をとることを決意した。

七

正直すごく気まずくて、研究室のドアをノックするのを三回くらいためらった。

課題のレポートは、明日の夜六時までに先生に直接手渡しするか、研究室のポストへ入れるか、メールに添付して送るかの三つの提出方法がある。別にリーチ先生に会わなくたって提出はできる。でも、ここで怖気づいたらダメだ。せめてあれを読んでくれたかだけでも確認しておきたい。

和歌を贈れば先生はきっと喜んでくれるはず。あんなに楽しそうに和歌のことを語る人だから。

そう思って一筆箋と筆ペンを買いに走り、恋を詠んだ和歌をいろいろと調べた。そして、今の自分にぴったりの歌を選んで、清書した。先生、あれ読んでくれたかな。

「課題のレポート出しに来ました」

やっとの思いで研究室の中に入り、用件を伝えると、奥で机に向かっていた先生がゆっくりと立ち上がった。

「期限は明日までですが、もう終わりましたか」

「はい」

「素晴らしいですね。余裕を持った提出で」

やった。褒められた。

先生は私からレポートを受け取り、表紙に目を通した。「確かに受け取りました。どうも、お疲れさまでした」と軽く会釈し、レポートをパーテーションの奥へと持って行ってしまう。

「あの」

はい、と言いながら先生は、何やらガサガサと紙束を整理している。

「えっと……その」

「言いにくければ、ゆっくりで構いませんよ。……そこにどうぞ」

先生はパーテーションの向こうから顔を出し、にっこりと笑いながら、椅子を手で示した。私と先生はいつものように、研究室手前のテーブルに向かい合って座る。

「……ポストに入れておいたんですけど」

「ああ、兼盛の和歌、ですか」

私は勢いよくうなずいた。さすが先生、察しがいい。あれは僕宛てということで間違いないですか、と言うのでもう一度うなずく。そんなの、分かりきったことじゃないですか。

「それなら、良かった。いや、正直少し驚いたんですがね。……僕も教員として、学生の皆さんの相談にはできるだけ乗ってあげたいと思っていますし、個人的にも恋の悩みには共感できる部分が少なからずありますから、時間の許す限り付き合いますよ」

え、待って。今ちょっと混乱してて、先生の言ってることがよく分かんない。どういうこと？

「秘密は決して口外いたしませんから、安心して話してください。ちなみにその……お相手はどのような方でしょうか。どういったご関係で」

ゴカンケイっていうか……うん、あの、前言撤回。先生は察しが良くなかった。根本的に勘違いをされていらっしゃる。

「すいません、なんか……もういいです」

「えっ」

私はぱっと立ち上がって、逃げるように研究室の外に出た。失敗した。あんなことするんじゃなかった。

「ちょっと待ってください！」

少し薄暗い廊下に、リーチ先生の声がわん、と響いた。

「……思いのほか、大きな声を出してしまいました」

ドアを左手で開けたまま、研究室の前で深々と頭を下げた。
「何か、失礼な発言があったのなら、申し訳ありません。ですがその……僕からも、受け取ってもらいたいものがあって」
そう言うと脇目も振らずに引き返し、二十秒もしないうちにまた慌ててドアを開けた。いつもゆったりと動く先生が、そんなに素早い動きをするなんて。
「貰ったらお返しするのが礼儀だと思うので、一応用意しておいたんです。形ばかりですが。小倉百人一首には小倉百人一首だろうと思って」
先生は縦長の和紙を一枚、私に差し出した。細くて角ばった筆文字で、歌が書いてある。

由良の門を渡る舟人かぢをたえゆくへも知らぬ恋の道かな

和歌だ。先生の書いた、和歌だ。先生はこんな字を書くんだ。繊細で、神経質そうな字。黒板にチョークで書くときとはまた違う、平安時代の書物のような一続きの文字。
「嬉しかったんですよ。まさか誰かから歌を頂けるとは思いませんでしたから。それに、和歌に興味を持っていただけたようで、教員としても喜ばしく思います」

先生、喜んでくれたんだ。
「それにしても、白崎さんは、手が美しいですね」
え、手？　思わず自分の右の手のひらを見る。
「あ、いえ、そういう意味ではなくて、筆跡の方です。古語の『手』には色々な意味があるって、高校でやりませんでしたか」
「……ああ！　やったような気がします」
「すみません、紛らわしい言い方をして」
「こちらこそ、勉強不足で」
恥ずかしい。急に「手が美しい」なんて、びっくりしちゃった。
「いえ。まあですからその、僕としては、白崎さんの作品を、また拝見したくなったんです」
ちらちらと私の顔色をうかがいながら話す先生は、可愛らしい。先生なのに。
「できれば……白崎さんのオリジナルのもので」
「オリジナル……？」
「ご自身で歌を詠まれてはいかがですか。勉強になりますよ。作品の登場人物に感情移入しやすくなったり、自分で書いてみるとまた読み方が変わったりするものですよ。あ、無理に文語体にしようとしなくて結構ですから。難しかったら、いつでも聞いてください。僕も精一杯協力します」
口をつぐんだまま、うなずく。先生は口元にホッとした笑みを浮かべた。素敵な人。誠実で、熱心で、面白くて。もっと、この人のことを知りたい。気持ちは伝わらなかったけど、むしろ伝わらなく

て良かったような気もする。ちゃんと気持ちを伝えるのは、もう少し後にとっておきたい。時間はまだ、たっぷりある。卒業するまでに、もっと先生といろんな言葉を交わしたい。

八

季節は過ぎ去ってゆく。夏の暑さが和らぎ、日が短くなり出すと、後期の授業も始まる。白崎さんと文学部棟の廊下ですれ違った。二か月ぶりに会った白崎さんは、少し髪が伸びたように見えた。お久しぶりです、と照れたようにはにかむ。夏休みには、『伊勢物語』や『古今和歌集』、『源氏物語』の若紫までを読んだという。勉強熱心だ。

授業があると言って、白崎さんは茶色のリュックサックから取り出した小さな封筒を僕に渡して去っていった。中には熊のキャラクターがデザインされた、黄色い縁取りのメモ用紙が入っている。女子中学生が授業中に回していそうな少女趣味的な雰囲気に、少しノスタルジーを感じる。水色のペンで書かれた文字は、筆のときとはまた違う、どこかあたたかみのある丸い字だった。

ふるさとの海へも行かず部屋にいて
逢えないせいで伊勢物語

夏休みはご実家に帰られていたようだ。地元には美しい海岸があるけれど遊びに行く気分にはなれない、恋しい人に逢えないせいで。部屋で黙々と「伊勢物語」を読むばかりだ――といったところだろうか。

散文的に繋がっていて、特別上手いというわけではない。けれど、「伊勢物語」が効いていて、男の訪れをひたすら待つことしかできない姫君のような、切ない恋心を思わせる。それにこの「逢えないせい」と「伊勢」という音韻の重なりは、白崎さん自身、知ってか知らずか。

研究室に戻って少し考える。「伊勢物語」の雰囲気を投影した返歌にしたい。「斎の宮」なんて、いいな。だが部屋に閉じこもる姿はなんだか白崎さんに似合わない。行動的な姫君にはこのくらいの勢いで自由な世界へ羽ばたいて欲しい。言葉遊びが好きな僕は、少々強引なまでに「い」の音を重ねた。

磯隠り見えぬ異性の腹いせに斎の宮よいづちへも行け

例によって筆ペンで和紙に書きつける。今度研究室に来たとき渡してあげよう。今までに感じたことのない充足感を抱きつつ、それを作業机の引き出しに丁寧にしまい込んだ。

歌の贈答をするのが、予てからの密かな夢だった。あのときは、「精一杯協力する」なんて、教師面でつい上から言ってしまったが、本当は僕自身が、歌を贈る相手を求めていただけなのだ。贈答の相手はもちろん、自分が想いを寄せる女性であることが望ましい。けれどこの際そこには目を瞑ろう。これも何かの縁だ。白崎さんには手間を取らせて申し訳ないが、幸い僕の趣味に付き合ってくれそうなので、できればしばらく続けさせて欲しい。

年明け、富山の実家から京都市内の自宅に戻る。午前中に降ったらしい雪が、屋根や道路にまだうっすらと積もっている。マンションの一階のポストを見に行くと、セールのチラシ類とともに、輪ゴムで束にされた年賀状が例年のごとく入っていた。

一枚一枚確認すると、その中に白崎さんからのものがあった。年末に白崎さんが来たとき、年賀状を書きたいから住所を教えて欲しいと言われて教えたのだ。

左端の方に、「後期は先生の授業がなくて寂しかったです。二年生になったら履修しようと思います。」というコメントがある。龍のキャラクターの横に、歌が書いてあった。

初蜜柑今年は今年の恋心ビタミンCとともに蓄う

なんとも可愛らしい。「初蜜柑」という語が俳句的な感じを与え、季節感がよく出ている。「ビタミンC」という溌剌とした健康的な語感が現代短歌らしい。一方、恋心を蓄えるという表現が慎ましい女性を想起させる。淑やかさと活発さの両立した歌といえるのではないか。

誰ゆゑに蜜柑買ひたる正月や恋も体も平らかになむ

「新年早々素敵な歌をありがとうございました。今年も健康に気を付けて学業に励んでください。」と葉書きの隅に書き添えておく。買ってきた蜜柑を一つ食べ終えると、さっそく投函しに行った。

それにしても白崎さんはいったい誰をそんなに想っているのだろう。

午前中は研究室の掃除をしていた。窓を開けると五月の清々しい風が入ってくる。その香りや肌触りに初夏を感じた。

白崎さんが『落窪物語』の資料を借りに来ると言っていたので、三冊の本を書棚から取り出して、予め机に置いておく。そのうちの一冊、『落窪物語注釈』の見開きに、歌を書いた紙を挟んだ。歌の右側に「白崎さんはいつも恋の歌ばかり詠んでおられますが、進展がないようですので、右近の少将に」と詞書めいたものを添える。白崎さんの想い人を「落窪物語」に登場する右近の少将道頼に例えるなら、道頼が屋敷から落窪の君を連れ出すべきだ。道頼は何をしているのだ。

願はくは涼しき五月の風に乗り姫もろともに渡らせたまへ

後日、白崎さんは資料を返しに来た。上目遣いでこちらをじろじろと見てくるので、『落窪物語注釈』を試しに開いてみる。

そこには「どういうことかよく分かりませんが、私には渡るべきところなんてどこにもありませんから。」と詞書風に書き添えられた歌があった。やはり少し伝わりにくかったか。

落窪の君の夫の道頼に君がとくこそなりたまふべけれ

なんという切り返しだ。いよいよ平安らしくなってきた。

「僕が道頼になれって言うんですか？　ははっ。白崎さん、随分歌を詠むのに慣れてきたみたいですね。いやー、気に入った。会心の返歌でした」

むくれて口を尖らせる白崎さんが、とても可笑しかった。褒めているのだがな。

九

リーチ先生はいつまで勘違いし続けるんだろう。私が好きなのは先生だけなのに。

先生が私のことをどう思ってるのか、いまいち分からない。でも歌は贈り続けたい。だって私が歌を持っていくと、「楽しみに拝読させていただきます」とか言って、いつも本当に嬉しそうな顔を見せてくれるから。そんな顔を見たくて、夜の一時まで古語辞典と格闘することもある。先生のそういうときの顔は、私にだけ見せてくれる、特別な表情のような気がして、このちょっと変わった関係をやめることができない。

リーチ先生の研究室に来るのは、もう数えきれないくらいになった。あまりにも暑いので先生のところで涼ませてもらおう、と思って訪ねた夏のある日のこと。研究室手前の大きな事務机の下で、黒々とした小さな蜘蛛が蠢いているのを見つけてしまった。

「ひっ！　せ、先生、蜘蛛……！」

とっさに一、二歩退いた私を尻目に、先生は優雅にささやいた。

「おや、アダンソンハエトリ」

「なんですか、それ」

私のそばまで歩いてきて、穏やかな口調で言う。

「そういう名前の蜘蛛なんです」

「先生、蜘蛛なんて好きなんですか」

「まあその、僕、基本的に虫は苦手なんですが、蜘蛛はなんというか、好ましい生物のような気がしていて……」

先生がしゃがみ込んで机の下を見ようとするので、私もつられてしゃがんだ。

「だ、だって、気持ち悪いじゃないですか」

「いえね、平安時代は、蜘蛛のことを『ささがに』といって、夕暮れ時に蜘蛛が天井から降りてきて自分の着物にとまるのを見て、恋しい人の訪れる前兆だといって喜ばれていたんですよ」

「そうなんですか？」

なんだか信じられない。「ささがに」とか言われても、蜘蛛よりむしろ沢蟹をイメージしてしまう。良さがいまいちよく分からない。足が八本もある虫が目の前で蠢くのを先生は正視できるの。

「実際、蜘蛛は害虫を捕食してくれる益虫でもありますから。殺生は無用ですよ」

私、ときどき先生が分からない。

「君を見ていると、なぜだか衣通姫（そとおりひめ）の歌が浮かんでくるよ、アダンソン。君は糸を垂らしているわけでもないのにね」

先生は床を少しずつ移動するそいつに向かって、一首、歌を口ずさんだ。

「我が背子が来（く）べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」

「……どういう意味なんですか？」

「恋しい人が来そうな夜、蜘蛛の動きが、それをはっきり知らせてくれる、ということですね」

うっとりとした表情で言葉を紡ぐ。蜘蛛が少しずつ移動して本棚の後ろへ回り込もうとするのを、

先生は慈しむような目でしばらく見送っていた。
先生が言ってるとなんだか雅なものに思えてくるけど、正直言ってやっぱり蜘蛛の動きとかあんまり見たくはない。なのでアダンソンさんはもう来ないで。邪魔しないで。

ささがにのふるまひしるき日ならでもいととく来むと我は思ふに

後日、先生にこの歌を持って行ったら、一読して少し驚いたような表情を見せ、それからふわりと笑った。
「いい歌ですね。よくお勉強されているのが分かります。僕個人としても、教員としても、大変嬉しく思いますよ」
この前と同じ慈しむような目で、私を見る。眼鏡のレンズ越しの、笑いじわのある優しい目元。ああ、幸せ。先生といると、幸せ。
「あの、ひとまずここのお菓子、全部持って行って構いませんから。今日は気分がいいのでサービスします。どうせほとんど貰い物ですから、ほら」
先生はきびきびと戸棚の上の方から黒い箱を取り出してきて、机に置いた。きらきらした金粉が散

りばめられた、黒く光る重箱。三段重なっている。先生がそれをぱかっと開けていくと、中にはお菓子がたくさん。クッキー、どら焼き、おせんべい、ラスク、甘納豆……。リーチ先生の研究室にあるお菓子の重箱は、国文科の間では結構有名だ。
「ああ、幸せだなあ」
先生の言葉に、思わず目を見開いた。遮光カーテンを少し開け、窓の外を見ながら独り言をつぶやいている。あのいつも幸薄そうな雰囲気をまとわりつかせているリーチ先生が。レアなところを見てしまった。いいなあ。ずっと幸せでいてほしい。

「また、来ました」
「おや、どうも」
そんな短い挨拶を交わし、いつものように椅子に座る。先生も立ち上がってこちらに歩いてくる。
「先生、私、先生のお邪魔はしたくないので、お仕事は続けてください」
「いや、しかし」
「私はここで勉強します」
「そうですか。それはそれで構いませんが」
この前梨子ちゃんに、「なんか志保ちゃんって、いっつもリーチ先生のとこ行くよな」って言われ

てしまった。「あんま先生の邪魔したらあかんで」。確かに、先生だってお仕事があるのだ。たいてい一時間か二時間くらいで帰るようにしてるけど、こう毎週のように行ってたら、流石に迷惑だよね。そう思って私は、先生のお時間を取らせないように気を付けることにしたのだ。先生の近くで過ごすことができれば、話ができなくてもいい。

「ところで、寒くありませんか」

先生がエアコンとリモコンを交互に見ながら言う。

「いえ、大丈夫です」

「では、このくらいに設定しときますか。いやー、十一月ともなると、めっきり冷え込みますね。僕、冬は苦手なんですよ」

先生はやせてるから寒いんだろうな。

その後、先生と私は同じ部屋の中で、黙ったまま別々のことをして過ごした。一時間ちょっと過ぎたころに、ゼミのことを思い出して、パーテーションの奥に向かって声をかける。

「あの、先生。ゼミの面談って、来週でしたよね」

来年の四月から私もいよいよ三年生になって、ゼミが始まる。所属するゼミは、希望のゼミの先生との面談や、希望者の数によって決まる。思わず、背筋が伸びる。

「私、老月先生のゼミに入りたいんですけど」

先生が立ち上がる音。少し微笑みながらパーテーションの奥から出てくる。

「白崎さんはそうおっしゃるだろうと思っていました。あの、そう硬くならなくとも大丈夫ですよ。僕のところは毎年多くても四、五人ってところですから。面談といっても、簡単な意思確認ですよ」

なんだ。良かった。

「白崎さんなら僕も安心です。演習の授業でも積極的でしたしね。白崎さんのことは改めていろいろと聞かなくても大丈夫だと思いますし、なんなら来週の面談は免除しますよ」

「えっ、それは困ります」

「なぜ困るんです」

「いや、ちゃんと正規の手続きを踏んでいただかないと」

「僕の裁量次第なんですがね、正規とみなすかどうかは。まあ、白崎さんがそこまで言うんだったらやりますが」

良かった。先生と話せる日を一日分損するところだった。

面談の日、先生はこんな歌をくれた。

ぬばたまの夜ごとに鳴けるきりぎりすまめなる様の好ましきかな

人を虫に例えないでください。でも褒められてるんだよね。「好まし」って。慌てて意味を調べる。「好色らしい。浮気っぽい」。これは絶対違う。「好きだ。心が惹かれる。好感が持てる。感じがいい。すてきだ」。……どれ？　どれなの、先生。ニュアンスによって私の喜び方も変わってくるんですが。

十

春がまたやってきて、ゼミのメンバーもまた入れ替わってゆく。今年の三年のゼミ生は白崎さん、秋本さん、杉浦さん、高山くんの四名。ちょうど進めやすそうな人数で良かった。

近頃は僕が研究室にいると白崎さんが来て、静かに自習をしていることが多くなった。僕もなんだか安心感を覚えてしまっていて、ちょっとした用事ならば留守番を頼んでおけるくらいに信用している。研究室へ戻ると学生の提出物を預かったり、他の先生からの伝言をメモに残してくれていたりするので、とても助かっている。

僕が研究室にいないときは研究室前のポストの中に歌が入っていることがあるので、必要以上に確認する癖がついた。いつの間にか歌を心待ちにしてしまっている。

春立ちて梅にとまれるうぐひすの心を梅は知ることもなし

先日もそんな春の恋歌が入っていた。恋歌のやり取りをすることで、平安文学の貴族により深く感情移入できる気がする。平安と言わず、昭和でも手紙を送り合うことはよくあったはずなのに、最近ではもう形式的なものしか送らなくなった。ポストを開けるときの高揚感と、その後に訪れるしばしの落胆を、現代人のほとんどはもう忘れてしまっただろうか。僕がまだ今ひとつ時代の流れに乗りきれていないことを、喜ぶべきか、悲しむべきか。

「お疲れ様です」

学食で休憩を摂っていると、僕に挨拶をする人がある。椎野先生だ。紫色のフレアスカート。相変わらず高貴そうなご様子でいらっしゃる。……大丈夫。僕はもうこの人に心を乱されたりはしない。

「お疲れ様です」

「さっき、可愛らしい秘書さんがお待ちでしたよ」

「え、白崎さんが」

それなら早く行ってやらねば。

「あの子、よく老月先生の部屋の前でそわそわしてるんですよ。あの手の学生はちょっと危ないん

じゃないですか。私も昔、男子学生に付きまとわれて迷惑したことあるんです」
「いえ、僕は別に迷惑だなんて思ってません」
「それならなおさら良くないですよ。気があると勘違いされますから」
勘違い。そんなことにはならないと思うがな。
「そういえば老月先生、前より雰囲気明るくなりましたね。歩き方も変わりました」
「そ、そうですか？」
フランス文学専門のくせして心理学者のような観察眼だ。
「ええ、前はそんなウサギ柄のネクタイなんてしてませんでしたよね」
「これは昔、母から貰ったものです。関係ありません」
昔、僕の誕生日に、僕が卯年生まれだからと言って母がくれたのだ。一度大学に締めて行ったら白崎さんがとても気に入っていたようなので、よく使うようになったのであって、別に僕の好みではない。
「そうですか。まあ、くれぐれもトラブルのないようにしてくださいね」
念を押すように言って、椎野先生が去っていく。高々と響くヒールの音が耳についた。まあ関係のないことだ。先を急ごう。
僕の研究室の前でリュックサックを背負いながら白崎さんが佇んでいる。
「あ、先生」
「お待たせしてしまったようで、すみません」
「いえ、そんな。まだゼミの時間まで四十分もあるのに、早く来ちゃったんで」

「構いませんよ、どうぞ」
研究室の鍵を開ける。白崎さんは慣れた動きで荷物を置いて席に着いた。俯くときにはらりと流れる黒髪が、美しい。荷物の中から一冊の本を取り出し、静かに読書を始めた。僕のことを根掘り葉掘り聞いてこなくなったのが、そこはかとなく寂しい。
「栞にでも使ってください」
本の横に差し出すように、縦長の紙を置いた。

梓弓春立てば来るうぐひすの声やゆかしき早な帰りそ

あくまでも平安を模したごっこ遊びだ。そのことをお互いに認識したうえで、最近は歌の内容もかなり恋愛感情の深いものを詠んでいる。信頼関係があるのだから、椎野先生の言うようなトラブルは決して起こり得ない。これは僕たちの共通の趣味のようなものであり、研究の一環でもあるのだから。

夜も更けるころ。築地の崩れを這いつくばってくぐり抜け、透垣の影を移動する。
今宵いらしてくださるなら、あなたのお心は本物であると思うことにしましょう、とのお言葉をいただいた。本来ならば気軽に歌を交わすことすら難しい身分の方だ。参らぬわけにはいかない。
透渡殿をなるべく静かに通り抜け、あの方の部屋まで辿り着いた。
「もし。歌をいただいて、参りました」
そう声をかけると、衣擦れの音が御簾越しに聞こえて、あの方の声がした。
「小夜更けの君ですね。お待ちしておりました」
すぐ近くに高貴の姫君がいる。この御簾を一枚隔てた向こう側に、おわすのだ。自然と胸は高鳴る。
「冷えますでしょう。……今宵ばかりは、お入りくださいまし」
御簾の下からそっと単衣の袖を差し出してきた。揃えた指先が、僅かにのぞいている。
「み、宮様。なりません」
「いいのです。誰に咎められようとも。小夜更けの君様に、わたくしへのお気持ちがあるのでしたら」
そう言うと、宮様はお手を戻される。
「困りましたね」
御簾に手をかけると、今度は御簾から離れていこうとなさる宮様の衣擦れが聞こえた。御簾を上げて一息にくぐり、中へと踏み入る。こちらに背を向けて座っておられる宮様のお姿に、はっとする。川の流れのように豊かな黒髪が、紅い着物の上に広がっている。それを少し持ち上げながら、着物の裾の上に乗り、近くへとにじり寄って袖をとる。

「自ら招いておきながら、なぜお逃げに」
「この顔をお見せするのが恥ずかしくて。貴方を想って流す涙で、すっかり曇ってしまいましたから」
「雨に濡れる花も美しきもの。雲のかかる月もまた、あわれなり。そう、存じます。さあ、宮様」
宮様の肩を抱き、引き寄せる。宮様の頭を胸元にもたれかからせ、その長い黒髪をかきやり、白い頬に触れる。おずおずとこちらを見上げるそのお顔は――――
「先生……？」
――――白崎さんではないか。
「先生ー！」
「は、はいっ！」
白崎さんの声に、慌てて肘掛け椅子から上体を起こす。
「私、そろそろ帰るので、あの、失礼します」
パーテーションの向こうの白崎さんに、僕はほとんど何も言えないでいた。
「……分かりました」
「起こしちゃって、すいませんでした。ゆっくりお休みになってください。それじゃ」
ぱたぱたと遠ざかってゆく足音を聞いて思った。急いでいたのに、わざわざ僕に一声掛けてから帰ったのかと。
眼鏡を掛け時間を確認する。いかん、どうやら三十分ばかり居眠りしていたようだ。……それにしても、忘れがたい夢だった。起こさないでくれても良かったのに。もう少し、平安貴族をやっていた

かった。小夜更けの君でも何でもいいから、もうしばらく、あんなふうに想われていたかった。思ひつつ寝ればや人の見えつらむ、夢と知りせば覚めざらましを。いやいや。そんな、小町じゃあるまいし。ロマンチックな妄想に耽っている場合か。

研究室を出るとき、白崎さんがさっきまで使っていた机の上に、メモ用紙がひらりと乗っているのを見つけた。僕が寝ている間に用意したとみえる。

たちつてとなにぬ寝姿かいまみて
だけど髪には触らなかった

白崎さん、僕のスペースに入ってきているじゃないか。やめたまえ。人が寝ているときに覗き見なんて趣味が悪いぞ。ああ、しかし寝ていた僕も悪い。白崎さんだって一声かけてから覗いたはずだ。黙ってパーテーションを越えてきたことなんて決してなかった。なぜ眠ってしまったのだろう。白崎さんの前で安心しすぎた。

しかし斬新な書き出しだ。「たちつてとなにぬ」が「ね」を導く序詞のように用いられている。面白い手法だ。それと、この下の句はどういうことであろう。強がりな思春期の子供みたいな書きぶり。否定は意識的になっている証拠だ。要するに、僕の髪に触りたかった……？　こんな癖毛の何がいいんだか分かりかねるが、触りたければ触ればよい。僕は別に構わない。

いやそんなことよりも。これは恋歌として解釈すべきなのだろうか。だとすると……。だとしたら。

もう一度作業机に戻る。引き出しを開け、小ぶりの紙箱を取り出した。白崎さんからの歌が溜まってきたころから、ここに入れるようになったのだった。一筆箋、メモ用紙、葉書きに折り紙。様々に工夫を凝らした歌を、改めてひとつひとつ読んでみる。やはりすべて恋の歌だった。僕の平安趣味に付き合ってくれていたのは、優しくて真面目な、その性格ゆえだとばかり思っていた。

とくとくと高鳴る鼓動。近づいてみると手は届きそうで、けれど月のように遠い。悩み、考え抜いた末に、嘆きつつその寝姿を後にする。「たちつてとなにぬ」は、そんな迷いにも見えた。……椎野先生のおっしゃることも間違ってはいないかもしれない。

十一

リーチ先生の研究室の机を、ゼミのメンバーで囲んでいる。私の隣に梨子ちゃん、向かい側が琴波ちゃん、その隣が高山くんだ。

今日は高山くんの研究内容について意見交換をした。高山くんは普段はゲームの話ばっかりだけど、ゼミのときは真面目な男子だ。

「えー、なので僕は、『堤中納言物語』の末尾断章は、書きかけの物語の切れ端のように見せて書いた、散文詩的な作品として見ることができるんじゃないかと今のところ考えてます」
「なるほど。確かに、ある程度の文章量があれば未完の物語という考えが妥当でしょうが、原稿用紙一枚にも満たないのではねえ。普通は、これくらいのメモ書きの段階で執筆途中の物語を人に見せたりはしないように思いますし」
「じゃあこれはもう、この状態で完成ってこと？」
資料をじっくり読んでいた琴波ちゃんが、高山くんに向かって問いかけた。
「一応、俺はそう考えとる」
「うーん。でも物語っぽく見えるんだけどな」
アイラインの入った大きな眼をちょっと細めながら、琴波ちゃんはもう一度読み返し始めた。梨子ちゃんが、はきはきした高めの声で尋ねる。
「さっき、散文詩的な作品って言うてたけど、これ、日記とか随筆っていう可能性はないん？」
「あー。言われてみれば確かにそうかもしれんな」
「『枕草子』にもこれくらいの分量の物語的な描写があるのですが、それに倣って挿入したという指摘もあります。ひとまず、『枕草子』との類似点を比較検討してみては」
「分かりました」
「まあ、『堤中納言』は作者も成立年代もばらばらの作品が一挙にまとめられているものなので、未だに謎が多いんですよね」

先生が困ったように笑った。
「僕がこれの編者だったら、作品の前か後に編集意図を必ず明記するんですけどね。僕がこの成立時期に生きていればなあ」
「あー、また言うてはる」
梨子ちゃんが笑みを浮かべながら私に言う。先生の妄想が始まった、ってみんな思ってる。
「いや、しかし鎌倉時代だったらやはり定家ですね。どうしてそこまで精力的に写本を作り続けようとしたのか、直接聞いてみたいものです」
「それはタイムスリップしてますよね。今の先生のままで」
「絶対、会話通じひんやん」
高山くんが冷静にツッコミを入れると、梨子ちゃんも乗っかる。琴波ちゃんは静かに笑っている。
「あー。でも定家と仲良くなれば、いろいろ聞けそうじゃないですか。式子内親王のこととか」
「定家と親しげに話せる身分やったらいいですけどね。確率低いですよ」
「高山くん、そういうこと言ったらおしまいですよー」
「あははっ」
面白い。先生いっつも集中砲火浴びるんだもん。私を見て先生がわざと裏声で言った。
「声が高いっ」
「あはははっ」
「公家っぽい。公家っぽかった！」

「声が大きいことを『高い』っていうやつや！」
「急に大河ドラマみたいになったね」
室内は活気に満ちた。
「白崎さん笑いすぎです」
えー。みんなだって笑ってますけど。先生だって口元が笑ってるし。先生もたまにこういうふざけ方するから面白い。ゼミが楽しいのは、結局先生のおかげなんだなって思う。

ゼミが終わると、高山くんはすぐ帰る。ネットゲームがしたいからだ。で、私と梨子ちゃんと琴波ちゃんは研究室でしばらく話したり、学食でおやつ食べたり、課題の相談をしたりして過ごすことが多い。
琴波ちゃんは三年になってからゼミで仲良くなったけど、大人っぽくてしっかりしてて、ゆっくり話しやすい。お父さんが大きな会社の役員だって聞いた。
今日は梨子ちゃんが部活の子に呼び出されて帰ったから、琴波ちゃんとふたりで学食に行った。お昼時と違って席は空いている。しばらく他愛もない話をしていると、琴波ちゃんはためらいがちに言った。
「ねえ、いきなり変なこと聞くけど、志保ちゃんて、老月先生のこと好きなの？」

「へ、」
「あ、違ったらごめん。でもなんか、そうかなって思って」
「なんでそう思ったの？」
「老月先生と話すときの志保ちゃん、ちょっと声が高くなるから」
ああ、そういうのやっぱり分かるんだ。
「そっか。……うん。好き、だね」
「ちょっと前の私と似てるなと思って。私も年上の人、好きだったから」
琴波ちゃんはココアを飲みながら、少し悲しそうな顔になった。お父さんの会社の社員さんが、ときどき家に遊びに来ることがあって、そのときに好きになったらしい。かっこよくて業績も優秀な人だったらしく、海外転勤が決まって、もう全然逢えなくなってしまった。
「せめて最後に気持ちだけでも伝えられたら良かった」
切ないその表情に、私まで泣きそうになる。やっぱり行動しないと、後悔するよね。
「志保ちゃんも、後悔はしないようにね。私も、心の中で応援してる」
「ありがとう」
そっか。みんな、つらい恋してるんだ。凛として見える琴波ちゃんにも、そんな過去が。人の気持ちって、分かんないな。先生の気持ちだって、何十回、何百回考えても、分からないことがどんどん増えていくばっかり。先生、思わせぶりだし。

十二

冬が始まろうとしていた。「寒いですね」なんて言いながら、今日も白崎さんは研究室に入ってくる。よし。

僕は立ち上がる。窓側に立てかけて置いておいた、折り畳み式の和風の衝立を持ち上げた。白崎さんに顔を見られないようにして、衝立を運ぶ。

「それ、どうしたんですか」

「先日インターネットで購入しました。いやあ、便利な世の中になったものです」

いつも白崎さんが座っている大きな机の上に、衝立を置く。こうしてから座れば、入り口側の席に座る白崎さんの姿は、見えなくなる。障子が張ってあるので、向こうの影はちらちらと微かに見える。

「便利な世の中と言いつつ、我々はあえて逆を行きましょう。白崎さんならこういうことにも付き合ってくださるのではないかと思いまして」

「え、どういうことですか」

白崎さんは困惑している。無理もない。しかし視覚的な距離をとるのが一番楽だと思ったのだ。

「煩わしいですかね。これだと確かに、少し声が届きづらいと僕も今思いました。しかし、むしろ平安時代を考える上では一歩近づいたと思いませんか。平安時代の状況を最も簡易的に再現してみたのですが」

「ああ、平安時代は物越しの対面ですもんね」

「ええ。ただ文献を読んでいるだけで終わるより、実際にやってみた方が勉強になることが多いのではないかと……」

白崎さんは、少し黙りこくってから、寂しそうに言った。

「じゃあ、もう先生の顔は見ちゃダメってことですか」

「いや、そうは言ってませんよ。ずっと顔を隠すのは不自然すぎます。他の人たちに見られないときだけ。白崎さんとここで、二人でお話しする時だけです」

「二人きりのときだけ……」

「はい」

僕は一旦、パーテーションの奥に引っ込む。引き出しの中から、用意しておいた歌と、冬季限定と書かれたチョコレート菓子を取り出した。白崎さんが使っているような小さめのメモ用紙を、最近買ってみたのだ。これに歌を書いて折り畳んだものを、紙のパッケージの隙間に差し込む。それを持って、手近にあったプリントの束で顔を隠しつつ、衝立の前まで歩いて行った。

「なんですか」

衝立の向こう側に、どうぞ、とチョコレートの箱を差し出す。白崎さんには僕の手しか見えない。

「あ、これ、前言ってたやつですか」

「そうです。買っておきました」

「先生そういうことする……」

ぼそっと拗ねるように言う。どんな顔でその箱を開けたのかは、想像で補うのみ。

みるままに冬は来にけり召す君をみられぬことの惜しくもあるかな

「見たいなら見ればいいじゃないですか。なんでわざわざこんなもので遮ったんですか」
ぶつくさ言う声は、次の瞬間にはもう幸せそうな声に変わっていた。
「あ〜美味しい。先生もどうですか」
衝立の横に個包装のチョコレートがひとつ置かれた。
「ああ、頂きます」
「先生が買ったのに、頂きます、なんて」
「あはは」
こんなことをしていていいのかと思う。何がしたいんだ、僕は。

十三

「弊社を希望する理由をお聞かせください」。そんな質問に、何度遭遇しただろう。そのたびに私は、きれいごとやありきたりな話を並べ立てて、不採用通知を受け取るばかりだった。
つらい。先生に逢いたい。でも先生に逢うと愚痴ばっかり言ってしまいそうで、足が重くなる。
最近、リーチ先生の姿を見るのがつらい。ゼミのときとか学校の中を歩いているときとか。二人きりだと顔を見られない分だけ、先生の顔をちゃんと見られるのは貴重な瞬間になってしまった。先生の方から、こっちを見てくるときもある。でも目が合いそうになると、つい逸らしてしまう。先生の前でどんな顔したらいいか分からなくなってしまった。
どうせこの恋は報われない。そんなことは分かってた。だからちょっとずつ先生と距離をとって、先生に逢えなくなるときのための心の準備をしようと思ってるのに。なのに最近、先生が積極的だ。衝立の隙間から、すっと紙を差し出しては、「また逢いに来てほしい」なんて意味の歌をくれるようになった。「平安らしいでしょう」と楽しげにして。
また好きになってしまう。これじゃ先生と離れるのがつらくなる。私もう四年生ですよ。あと一年しかないんですよ、先生。優しくしないでください。勘違いするから。
卒業したくない。卒論も書きたくない。でも先生に心配されたくないから、研究は進めてますよって言わないといけない。つらい。
ベッドから起き出して、ティッシュペーパーで思い切り鼻をかんだ。涙も拭っておく。そしてまた

布団にくるまっては、先生の顔を思い浮かべる。

十四

歳月人を待たず。お構いなしに春は来る。僕も少々忙しかったのと、就職活動で忙しい四年生の都合を考慮し、四月はほとんどゼミの日を設けなかった。

白崎さんも忙しくしているのだろう。しばらく会っていない。様子が分からないが、先日会った秋本さんが言うには、就職活動の過密スケジュールがたたって体調を崩したと聞いた。無理はしないでほしい。歌を詠む時間はなくても、研究室に少し顔を出してくれるだけでいい。元気な様子が見たい。

ああ、また白崎さんのことを。学生の一人を特別視してはいけないと何度も己に言い聞かせているのに。流石に教え子に特別な感情を抱くのは倫理的に問題があるだろう。いや、頭の中で考えるだけなら罰せられることはないからいいのか。しかしそうやって感情がエスカレートした結果、大きな問題に発展してしまう例は枚挙に暇がないのではないか。先日も「女子高生にわいせつ　男性教諭を懲戒免職」などという新聞の見出しを見たばかりだ。懲戒免職。恐ろしい響きだ。もしそうなったら僕の人生は終わりだ。いよいよ出家するしかない。あ、でもあの手の事件は相手が未成年だから問題視されているのか。だとしたら白崎さんは成人しているからその点は問題ないと言える。いやいやしかし。問題視するような部類の人間に知れたら、結局同じことだ。

それに、いわゆるわいせつと呼ばれる行為に及んだ場合、争点になるのは相手の同意があったか否かだ。相手の年齢以前にまず同意がなければならない。では同意さえあればよいのか。しかしそもそも同意とは何だ。何を以て同意とするのか。

白崎さんはどんな気持ちで僕に歌を詠んでいたのか。どんな気持ちでいつも研究室に来てくれていたのか。恋歌を詠む、というのはどのくらいの恋愛感情なのか。彼女の気持ちが分からないことにはどうにもならない。

偏見かもしれないが、若い女性というものは、知性がありそうに見えたり、相談に乗ってくれたりする身近な年上の男に憧れを抱きがちだ。そのような話をどこかで聞いたし、そういうものだろうと僕も思う。

しかし、そういう男から、「教員」という武装を解除した場合、どうだろうか。教員の肩書きを捨てて生身の男となったとき、それでもなお男の魅力を残しているだろうか。外では先生と呼ばれていようとも、決して先生的ではない生活者としての一面をいくつも抱えていて、自分の得意分野を一方的に語り、人並みに性欲も持っている。そういう一人の男として見たとき、それでもその先生、もとい彼を想い続けられる女子生徒・女子学生はいったい何人いるだろうか。心ない陰口に傷ついたり、卒業後新たな環境で刺激的な出会いがあったりしても、一途に彼に会いに行く情熱が、彼女らにあるだろうか。

教員との恋愛など、所詮そんなものだ。

僕はそう結論付けてみたものの、作業机の引き出しを開けてみて、はたと気が付く。彼女宛てに書いた歌が入っている。いつの間に入れたのだったか。確か先週書いたままになっていたのだ。

年ごとに咲くべきものと待つままに桜花なき春を見しかな

白崎さんがここに来てくださらないと、この歌は渡せず仕舞いになってしまう。もう春も終わっていく。あまりこういうことはしたくなかったが、大学やゼミの連絡用のメールに、歌を打ち込んで送信した。

十五

夏が始まるころ、なんとか私は京都府内の印刷会社から内定を頂くことができた。福井に帰らないの、とはよく聞かれたけど、別にこだわってません、と答えていた。実家とそこまで距離があるわけでもないし、京都の方が、企業が多くて就職活動がしやすかったし。

バカだな。結局リーチ先生のいる京都から離れようとしないなんて。就職、決まりましたって先生に報告したら、先生も喜んでくれたけど。「それなら、卒業してもまたここに遊びに来られますね」なんて言うんだもん。どうせ社交辞令に決まってるって思うのに、おんなじことを他の学生にも言ってるはずだって思うのに、やっぱり期待してしまう。

私が卒業したら、先生はまた別の誰かに歌を贈るんじゃないの？「桜花なき春を見しかな」？いくら私が先生のとこによく通ってるからって、流石に大げさすぎるでしょ。私がいないとダメみたいに聞こえる。卒業したくなくなる。

今まで先生の研究室に行きすぎたんだ。先生まで私と話すのが当たり前みたいに思っちゃってる。一週間に一回だったのを、二週間に一回にして、一か月に一回にして、そうやって二人きりになるのをちょっとずつ減らしていけば、私だっていつか諦められると思ってるのに。逢えない時間がますます苦しくなる。特に夜がつらい。先生を想って、もう何度泣きながら夜を過ごしたんだろう。

十六

教育機関は教育機関以外の何物でもない。そもそも大学とは学問を修める場であって、心の楽しみや人との出会いを求めるのは動機が不純だ。反省しなければならない。教育者が学問の場においてむやみに心を惑わすことは慎まねばならない。

それなのに。ああ、志保さん。近頃の僕はどうかしてしまっています。

もはや心の中では、白崎さんのことを志保さんと呼ぶようになっていた。これくらいは許されてしかるべきだ。いや、許すも何も、人の心は決して覗き見ることができないのだから、心の中でどう呼ぼうが、僕の勝手だ。僕はまだ、何らのそしりも受けることのない安全地帯の中にいる。まだ大丈夫なはずだ。

志保さんが来た。ノックの仕方でなんとなく分かるようになってしまった。

「先生」

研究室に入ってきた志保さんの声が、暗い。

「ああ、こんにちは」

何かと忙しいのかもしれないが、四年になってからここへ来る頻度も下がったし、歌も詠んでくれない。何か悩みがあるのだろうか。

「どうされましたか」

志保さんは黙っている。僕はいつものように衝立を持って行き、机の上に置いた。衝立の向こう側の白崎さんは、どのような顔をしているのだろう。じれったいが、僕から提案したことだ。仕方がない。

「近頃元気がないように見えますが、僕の気のせいでしょうか」

やはり返事がない。明るく笑う志保さんをよく知っているだけに、心配だ。

「白崎さん」

「はい」

「何でもいいので、話してみてくれませんか。悩みを抱えるのは、恥ずかしいことではないですから。それに、物越しの方がかえってものが言いやすいということもあります」

衝立の障子紙の、ぼんやりした影が少し動いた。

「……卒論、出さなくてもいいかなって思ってて。どうせ全然進んでないし」

志保さんに限ってそんな。

「卒業できませんよ」

「はい」

「……就職に支障をきたしますよ」

「……私が今から言うことをちゃんと聞いて、考えてくださったら、卒論書こうと思ってます」

なんだ、書くんじゃないか。脅かさないでくれ。真面目で研究熱心な志保さんがなんてことを言うのかと思った。

「先生がちゃんと考えてくださったら、これからは私、ゼミのとき以外はもうここに来ません」

「は？　どうしてそんな……」

少年のような上ずった声が、室内に間抜けに響いた。
「聞いてください」
「はい、聞いています」
「ちゃんと、考えてください。じゃないと卒論書きませんから」
「もちろん、考えます」
そういう他にない。なんだ、「考える」って。何を考えろと言うのだ。しかも、「考え」たら、もうゼミ以外で逢えなくなるらしい。が、「考え」なければ卒論を書かないという。教員を脅すな。
「私……」
衝立のぎりぎりまで頭を近づけ、耳をそばだてる。苦しげな息遣いが聞こえた。
「好きです。先生のことが、ずっと、好きでした」
はっとした。志保さんに貰った恋歌が、いくつも頭の中を駆け巡る。衝立の向こうからは、安堵するようなため息。
「やっと、やっと言えました。ずっとつらかったんです。どんなに恋の歌を贈っても、先生にはこの気持ちが伝わらなくて。でも先生が優しいから、やっぱり好きって思ってしまって。ここに来るのがやめられなくて。先生に喜んでほしくて難しい本いっぱい読んで、歌考えて……つらかった……」
涙声で吐き出される感情が、僕の心を痛めつける。志保さん。そんなふうに思って。
「すみません。……でも伝わっていましたよ、白崎さんのお気持ち。本当はもう少し前から、気づいていました」

「分かってて、どうして私と距離をとろうとしなかったんですか」
鼻水をすすりながら、責めるように言う。
「しましたよ。これ」
僕は衝立の縁を掴んだ。
「これ、ただの平安時代ごっこじゃなかったんですね。でもこれ、逆効果でしたよ。顔が見れない分、今どんな顔してるんだろうって想像しちゃうし、ゼミのときとか、学校の中で見かけたときに、ああ、堂々と先生の顔見れる、って嬉しくなっちゃうし」
確かにそうだ。自由に顔を見ることの出来ない状況では、抑圧されている分、やっと顔を見られた時の喜びが増幅される。その格別な喜びに、恋心は募る一方だ。
「そうですね。申し訳ないことをしました。じゃあもうこれ、どかしましょうか」
「あっ……やめてください」
立ち上がって衝立を持ち上げようとすると、志保さんの両手が衝立を掴んで離さない。
「今、ひどい顔してるんで」
「……分かりました」
見たかった。泣き顔でもいいから。再び座ると、志保さんの呼吸が浅くなった。
「先生、私のこと振ってください」
なんてことを言うんだ。そんな悲しい台詞、聞きたくなかった。
「気持ち、伝えられたからもういいんです。諦めます。ちゃんと卒論書いて、先生からも卒業したい

んです。だからほら、早く振ってください。こう言えば、断りやすいですか？　先生、私と付き合ってください」
「白崎さん、一旦落ち着きましょう。焦らないで、ゆっくり考えましょう。ひとまず卒論を書いてからもう一度きちんとお話ししましょう。それまでに僕も心の整理を……」
「嫌です。それじゃダメなんです。まだ望みがあるかもって期待してしまうと、卒業したくなくなるんです。今、振ってください」
困った。なんと言えばいい。なんと言えば、この場を切り抜けられる。
「……どうして？　先生でしょ？　学生の告白断るくらい簡単じゃないですか。ちゃんと先生らしくしてください。……老月先生って、先生なのに、先生っぽくないですよ。そういうところですよ。そういうところがダメなんです」
俯いたまま立ち上がる。
「意気地なし」
吐き捨てるように言い残し、たっと駆け出した。ドアが乱暴に閉まる。
「し、志保さんっ！」
思わず口にしてしまったその名前を、今度は静かに呟いてみる。志保さん。僕は何を間違えたんでしょうか。どうして、もう逢いに来ないなんて言うんですか、志保さん。あんなに楽しい時間を、素敵な歌を僕にくれたというのに。ああ、志保さん。声に出して、志保さんと呼んでみたい。胸が熱くなる。涙がこぼれる。この気持ちを、何と呼べばいいのだろう。

お互いの立場に愕然とした。先生らしくしろと言われたが、確かにその通りだ。僕には志保さんを追いかけられない。せめて志保さんが卒業していれば。せめて誰の目も気にならないところなら。
いやいや、そういう問題か。もし志保さんを追いかけて行って、無理やり迫ったところを通報されでもしたら一巻の終わりだ。僕には行けない。
午後の予定が入っていなくて幸いだった。誰も来ないところへ行こう。ここにいるのはつらい。志保さんに貸した本。志保さんがよく食べていたお菓子。志保さんに頂いた歌の数々。思い出すものが多すぎる。

もう恋はしたくない。志保さんと出会ったばかりのころはそう思っていたのに。僕は一体、どれくらい苦しめば、恋に心を惑わすことがなくなるのだろうか。
志保さんは僕が思っているよりもずっと大人だった。恋心を抱えながら、深く悩み、真剣に考えて、必死に想いを断ち切ろうとしていた。それなのに僕は上手い断り文句も言うことができないなんて。なんて弱い人間なんだろう。いい年をして。まるで舵を失い、沖合を彷徨う小舟だ。自分でもどこへ行けばいいのか分からない。なすすべもなくふらふらと大海を漂うばかり。ああ、どっしりとした山のように、簡単に心を揺れ動かすことのない人間になりたい。ゆくへも知らぬ恋の道かな。そんな歌を贈ったこともあった。あれから始まったのだ、この関係は。まさか自分に返ってくるとは。

梨木神社の境内の門に、十月の冷たい雨が叩きつける。あちこちに水たまりのある道を歩いてきたせいで、ズボンの裾に泥が跳ねている。皺の多いシャツは、いつになくズボンからはみ出したままで、髪は強風にあおられて成すすべもなく、眼鏡には雨の滴が散らばっている。

なんという格好。流石に無様というほかあるまい。十七歳も年下の女の子に翻弄されて。平安時代の、例えば頭中将に任ぜられるような容姿端麗な色男であれば、こうした風体であっても、宮中の才媛を篭絡することができたのかもしれない。流麗な文字で「思い乱れて」などと詠んで贈るのだろう、おそらく。今世の我が身には不可能な所業。時代も文化も身分も違う。しかしそれ以前に、自尊心が違うのだろう。自分自身、自尊心の低さは自覚している。

だんだんと雨は激しさを増してきていた。傘を持ってきていない僕の体に、雨風は容赦なく吹き付ける。

「先生、探しましたよ」

雨音交じりに、明らかに僕に向けられた声が、背後から聞こえた。門の下で、志保さんの方は見ないままましゃがみ込んだ。居たたまれない。惨めだ。こんなところを見られるなんて。教員としても、大人としても、男としても格好がつかない。いや、むしろそのほうがいいのかもしれない。無様な姿を見せるだけで僕への関心が薄れるのなら。志保さんがなるべく苦しまずに僕を忘れられるなら。良からぬ噂を立てられる心配もなくなることだ。僕も失職の危機から脱することができる。

「あのっ、さっきはすみませんでした。冷静になって考えてみたら、先生に向かって私、なんてこと言ったんだろうって」

「いいんです。白崎さんの言う通りなんです。もともとこういう人間です。先生なんて、そんなに格好いい職業じゃありませんからね」

志保さんからは顔を背け続けたまま答える。門の屋根から滴り落ちる水を見つめている。

「情緒不安定ですから。白崎さんの好きな先生なんて、ここには存在しません」

ざあざあと降りしきる雨が、時折眼鏡のレンズにはねる。

「これで、僕のことを忘れられそうですか」

志保さんは黙っている。見なさい、今の僕を。恋に煩うような価値なんてない男です。そうだ、それでいい。そのまま踵を返してもう戻って来るな。そして二度と僕に、恋の歌なんか寄越さないでくれ。

「ダメです」

背中にそっと、彼女の指先が触れていた。思わずのけ反りそうになる。

「先生がちょっとかっこ悪いくらいじゃ、好きな気持ちは変わりません」

「え、」

彼女の手が、僕の背中に優しく置かれていた。シャツ越しに伝わってくる手は、温かかった。

「一年生のとき、先生チャペルで泣いてましたよね」

いったい何を言い出すのか、この子は。思わず後ろを振り返った。驚いて僕を見る彼女の顔は、すぐさまほころんだ。

「やっとこっちを向いてくれましたね」

「白崎さん、まだそんなこと、覚えていたんですか」

「たまたまチャペルに行ったら、先生を見かけたんです。よく見たら先生が泣いてて、それで私……それ以来、先生から、目が離せなくなったんです」
この子はそんなに前から、僕のことを。僕は立ち上がる。志保さんも、すっと立ち上がって、僕を見ている。
「ではあなたは、こんな僕を見ても驚かないと」
「はい。それどころか」
僕は拝殿を背にして志保さんと向かい合っている。彼女は僕の右腕を両手で包み込むようにして掴んだ。限りなく優しい力に捻じ伏せられて、右腕はおろか、体全体が金縛りにあったように動かせなかった。
「好きですよ。先生の、情緒不安定なところ」
なんだって。そんな人がいるのか。この世に。そんな女性も、存在しているというのか。
「情緒不安定ってことは、情緒豊かってことでもあるじゃないですか。そこがいいんです、先生は。そういうところが、私の心を、揺さぶるんです。だから先生は、そのまんまの先生でいてください」
なんて女性だ、あなたは。意気地なしと言ったかと思えば、不安定さが好きだなんて。僕は彼女を何も分かっていなかった。
「変わった女性ですね、白崎さんは。そんな方は、初めて見ました」
「初めて」
「ええ、初めてです」

志保さんは悪戯っぽい笑みを浮かべる。
「じゃあ私、先生の初めてを奪ったんですね」
「誤解を招く言い方はよしてください」
軽やかに彼女が笑う。時雨の打ち付ける薄暗い境内に、明るい笑い声が響いた。
これは光か。僕の光なのだろうか。この柔らかな光を僕が浴びても、罰は当たらないだろうか。僕の心に無条件に差し込んでくるこの光を、もう少しだけ、浴びていたいと思った。ここから先は安全地帯の外だがもう構わない。僕の人生の重大事だ。
「そろそろ帰りましょうか。こんな天気ですし、のんびりしているとお互いに風邪をひいてしまいます。お詫びと言ってはなんですが、車でお送りしますよ」
「え、先生の車」
彼女は何故か急に俯いて身じろぐ。
「ええ。無理にとは言いませんが」
こくり。彼女が頷いた。
「無理にとは言いませんよ」
「いえ、是非。お言葉に甘えて」
そう言って心持ち微笑んだ。年上の男をからかって楽しそうにする。突然表情を変える。何を考えているのかは皆目分からない。しかし、可憐だ。女性というのは、ああも可憐に微笑むことができるものなのか。ふっくらとした頬の輪郭の中に、口角が少し上がり潤った唇があって。

「先生、どうぞ」
軒下で彼女は自分の持ってきた傘を開くと、僕の頭上へともたげた。傘を受け取った僕の右手の指先が、傘の柄から離れようとする彼女の華奢な手に、一瞬触れた。
水玉模様のあしらわれた透明の傘を差しながら、彼女の歩調に合わせて歩く。彼女が雨に濡れてしまわないように。誰かのために傘を差して歩くということが、こんなにも献身的で、かつ喜ばしいことだとはつゆ知らなかった。
足繁く通ってきては、「先生、」と朗らかに話しかけてくる、彼女と共にありたい。素敵な歌を詠んでくれる、彼女の言葉と共に生きてみたい。彼女こそ僕の救いかもしれない。だとしたら彼女が卒業して僕の前から去ってしまうのを、黙って見ているわけにはいかない。

十七

濡れそぼって頬や首筋に張り付いた髪をそのままに、リーチ先生は運転席でハンドルを握る。何だか物思いに耽るように、ふう、と息を吐いた。そういえば今まであまりイメージしてこなかったけれど、先生は車に乗るんだ。こんなふうに、いつも物憂げに車を運転しながら大学に通っているんだろうか。

そんなふうに想像を膨らませながら、目を閉じて、息を吸い込んでみる。これが先生の車の匂い。
「白崎さん」
くるっとこちらを見た先生と目が合ってしまう。
「はいっ」
「シートベルトを締めていただけますか」
「あっ、ごめんなさい」
慌ててシートベルトを着ける。先生に気を取られて、つい。
「それでは出発しますよ」
先生がエンジンをかけた。車はゆっくりと動き出す。先生の角ばった手に握られたハンドルが、右へ左へと滑らかに動いている。
いつもは少し物足りないように見える細い腕が、車を運転しているからだろうか、頼りがいのある腕に見えた。助手席から見る先生は、やっぱり大人の男性だ。
「あ、ここに停めますよ」
「はい」
先生の白い車が、私のアパートの駐車場に停まった。わあ、本当に送ってもらっちゃった。
「それじゃ、ありがとうございました」
「あの」
ドアを開けようとした私を、先生が制した。

「志保さんも、そのままの志保さんでいてください。志保さんのいいところは、素直で、真っすぐなところです。だから……」
「先生。今、私のこと、志保さん、て」
「え、あっ……」
先生ははっとした顔で、横を向いた。可愛い。
「すみません」
「いえ、もっかい、呼んでください」
「えっ……し、志保さん」
「はい」
え、これって、先生、私のこと好き……だよね？
「……お気に召して頂けたようなので、これからは親しみを込めて『志保さん』と呼ばせていただきますね。二人きりのとき、だけ」
「はい」
「志保さん」
「はい」
「諦めなくていいですから。これからは、僕も逢いに来ます。卒業しても、また逢えますから。だから……卒論出してくれますね」
「うっ……。はーい」

なんだ、結局卒論の話か。うまいことやられた。でも私決めた。卒論書く。自分のためにも、先生のためにも。だって先生、卒業しても逢ってくれるんでしょ？ それってつまり……そういうことでしょ？

十八

京都市内にも雪のちらつく寒い日だった。僕は研究室で一通のメールを受け取った。志保さんは、卒業論文を無事提出できたんだそうだ。そうか。終わったか。『とりかへばや物語』の和歌研究。男女が入れ替わった状況を読み慣れてきたところで再び元の役割に戻る、という非現実的な話ゆえに、他の古典作品の読解以上の想像力を必要とする。だが彼女は、この研究室で僕と歌を詠み交わしたことを想像力の糧としたのだろう。少しでも、彼女の研究の助けになれたと信じたい。
僕も待つのではなく通う側になりたい。そう思った勢いで電話をかけてしまったが、少し照れながらも志保さんは僕を家に招いてくれた。
実際に行ってみると、志保さんの部屋は、意外にも洋楽のCDや少年向けコミックがたくさん置かれていた。
「志保さんの新しい一面を見ました」
「ちょっと、あんまりいろいろ見ないでください」

何も隔てるものがないと、志保さんの恥ずかしそうな顔もよく見える。やはり行動を起こして良かった。

手土産のドーナツを食べながら二時間ほど話して、「明日も来ます」と言い残してその日は帰った。

「先生急にどうしたんですか。二日連続で遊びに来たりして」

「え、ご迷惑でしたか」

「いえ、そうじゃなくて。いつの間にか先生がどんどん積極的になるなあ、と思って。なんか、ちょっと戸惑っちゃいます。先生は、私がしょっちゅう研究室に通ってたとき、戸惑いませんでしたか」

「確かに、少し驚いたかもしれません。行動力あるなあ、と。でも、白崎さんのことを迷惑だと思ったことはないんです。不思議と」

もしかしたら僕は、思ったよりも前から志保さんに好意を寄せていたのかも知れない。いつからか僕は、自分の中に志保さんの像を思い描いて、空想上の恋人のようにしていたのではなかったか。その空想に向かって、歌を詠んで。けれど志保さんと話すうち、志保さんをもっときちんと知りたいと思うようになった。空想ではなくて、実像の志保さんに歌を贈りたいと思った。

「筑波嶺の峰より落つるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる」

ローテーブルの向こうから回り込み、目を丸くして固まっている志保さんの隣に座る。

「先生……」

髪を、撫でてみた。柔らかい髪が指を通り抜けていく。肩に手を置きながら耳元で言った。

「明日も、来てもいいですか」

「明日も……？」

「はい。明日はお餅を食べたいです。用意しておいてください。これ、一生のお願いです」

十九

今日も先生が来てくれた。先生の様子がちょっと変だけど、可愛いからまあいいんだ。

「お餅はありますよね」

私の部屋に入るなり、先生はそう言った。

「はい。昨日先生が用意しておけって、おっしゃってたので」

私は冷蔵庫から角餅の入った紙箱を取り出した。実家から送られてきたものだ。二つ、レンジで加熱する。

「先生、砂糖醤油にしますか、それとも、お醤油だけ？」

「ああ……では僕は、醤油だけで結構です」
先生はいつも以上にかしこまった様子でピンクのカーペットの上に正座していた。
「ふむ……美味しいです」
「良かった。でも、先生がお餅好きだったなんて、初めて知りました」
うん。新しい発見。
「いえ、別にお餅が好きというわけではありませんよ」
なんですと。
「かといって、どうしても食べたくて仕方がない状態に昨日突然陥ったというわけでもありません」
「じゃ、じゃあ一体どういうわけなんですか」
わけが分からない。先生は心なしか微笑んでいる。
「そもそも、わざわざ志保さんのところに来ずとも、餅が食べたければ自分で買って食べればいい話ですしね」
ますます分からない。先生が小さくため息をつく。伏し目がちになって、呟くように言った。
「三日夜の餅……ですよ」
はっとして、私は目の前で固まっているリーチ先生を見た。頭の中が混乱している。まさか、そんなはずは。だけど、それって。先生が、言おうとしているのは。
「志保さん、僕は今まで、生きていてもつらいことばかりだと思っていました。今までの自分の恋がうまくいかないのも宿世の因縁と思って、一度諦めたくらいなんです。だから、僕は志保さんで最後にしようと思っています。志保さんとうまくいかなければそのときは、今度こそ僕は金輪際、恋をするのを諦めます。だから、そのくらいの覚悟で――」
私はお餅の最後の一口を麦茶で喉に流し込んだ。おもむろに立ち上がって、そっと先生の背後に回り込む。そして、先生の真後ろに腰を下ろした。ちょっとだけ、思いきってみることにする。正座のままの先生の背中に、右頬をぴったりとくっつけた。そのまま少し、体重を預ける。
「志保さん。改めてお尋ねしますが、本当に、教員である僕と、恋仲になる覚悟はおありですか」
恋仲。素敵な響き。頬には先生の白いセーターの肌触り。柔軟剤みたいないい匂い。
「はい、もちろん」
ぴくりと動いた。ふうっと息を吐く音が聞こえた。先生の背中は、もうすっかり熱い。先生はゆっくりと振り返り、私の横に座り直して、それから――――私の肩を、抱き寄せた。耳元に、息がかかる。
「結婚して、ください。志保さんが、卒業したら」
三日夜の餅。平安時代の婚礼の儀。男性が女性のもとへ毎晩通い、三日目の夜に女性側の家が男性に餅を供する儀式だ。やっぱりそういう意味だったんだ。
「あ、いや、もちろん、親御さんにもご挨拶に行かないといけませんし、すぐにってわけじゃありませんよ。しばらく結婚を前提に、お付き合いさせていただきたい、という意味です」
先生は、今度はぺらぺらと早口になった。夢を見ているみたいで、でもこれがもし夢でも、きっといつまでも忘れないだろうと思った。そんな夜だった。
「僕、ずっとやってみたかったんですよ。密かな夢、というか」

「あははっ。三日夜の餅がやりたいなんて、先生らしい」
「でしょう？」
先生は少し邪魔になったのか、眼鏡を外した。テーブルの上に無造作に置くと、私の肩のところに顔をうずめてきた。
「良かった。そう言ってもらえて。普通、こんなことが夢だったなんて言ったら、馬鹿にされて、変人扱いですよ」
「馬鹿になんて、しませんよ」
「そうでしょうか」
「そうですよ」
私は左手で、先生のもじゃもじゃの髪を、くしゃっと撫でた。「愛しい」って、こういう気持ちを言うのかな。
「志保さんで良かった」
「え？」
「チャペルで泣いてる僕を見つけたのが、志保さんで良かった。僕を理解しようとしてくれる、志保さんで良かった。僕にはもう、志保さんだけが救いです」
先生が泣いてる。私の左肩にあごを乗せて。私、今、先生の泣き顔を独り占めしてる。私まで泣きたい。それくらい幸せだと思った。苦しいくらいに、幸せ。こんな時間が、もっとずっと続けばいいと思った。先生の声。先生の匂い。先生の体温。――――先生、好き。

私の肩に乗っていた先生の右手が、私の頬を包むように触れる。先生の親指が、私のおとがいへと滑らかに移動して、先生の方へと自然に顔が引き寄せられる――――
「いやっ」
間一髪のところでとっさに顔を背けた。
「すみません」
「やっぱり、その、そういうのは、まだ、やめませんか」
「分かってますよ。教員である以上、教え子のあなたに、在学中から、そのー、手を出す、ような真似はしませんよ」
先生は慌てた様子で居ずまいを正し、テーブルの上に置いていた眼鏡をかけた。
「そ、そろそろお暇します」
「え、はい」
先生は急に立ち上がって帰り支度を始めた。
「もう九時でしたか。こんなに長居するつもりはなかったのですが」
「あ、まあ、それは別にいいんですけど、あの、近所の学生とかに見られないように、その、お気をつけて」
「ええ、そうですね」
お互いに話しながら、目を合わせることなく、玄関まで来た。靴を履き終えた先生の背中に、声をかける。

「じゃあ、おやすみなさい」
「ええ。……あの」
先生がこちらに向き直った。私は先生の顔を見られない。
「すみません。やっぱり、一回だけ」
先生がまた眼鏡を外す。突然肩をつかまれたと思ったら、先生の胸元がもう目の前にあった。そんなふうに抱きすくめられたら、とっさに動けるはずがない。感情を押し付けるような、有無を言わせない強い力。先生に、こんなに強い力があるなんて。あごの下に指先が触れて、少し顔を持ち上げられる。私は反射的に目を閉じた。
数秒間、その柔らかい感触を私の唇は感じていた。抱きしめるときの強い力とは裏腹に、優しい触れ方だった。体中を駆け巡る血潮を感じる。私は全身を、震え出しそうなほどの歓喜に耐えながら先生の薄い唇に捧げていた。
先生はふっと私から離れると背を向け、もうこちらを振り向くことはなかった。
「おやすみなさい」
無感情にも聞こえる普段通りの落ち着き払った声が、玄関の薄暗がりに淡々と響いた。先生がドアを開け、一歩、二歩と歩み出す。冬の夜の冷気が入り込んできた。先生は静かにドアを閉める。ドアの向こうでゆっくりとした歩調の足音が遠ざかっていくのが、風の音と交じりながらかすかに聞こえた。
先生のいなくなった空間が、先生のいないこれからの時間が、余計に寂しくなる。
「せん、せい……っ」

耳元の低い声。唇の感触。頭の中で何度も反芻する。甘い興奮のあとに押し寄せる強烈な寂しさが、胸を締め付けるように苦しい。
私は玄関の冷たい床に座り込んだまま、しばらく涙も拭えないでいた。

春。とうとう卒業を迎えた。先生と出会った大学ともお別れ。何度も通った研究室。先生が祈っていたチャペル。先生の授業を受けていた教室。ひとつひとつ思い出しては、ちょっぴり寂しくなった。
卒業式の二日後。うちのアパートの前に、先生の車が停まる。今日は先生と広隆寺に行くのだ。なんでも、有名な半跏思惟像を私に見せたいらしい。先生はほんとに宗教施設が好きですね、と言ったら、最近はあまり行ってないんです、と言う。
「志保さんがいるから、でしょうね。信仰の対象は、もう志保さん一人で十分です」
「またおかしなこと言ってる。普通に好きって言ってください」
「そういう言葉を連発するのもどうかと思いますよ、僕は。……ああ、でも僕ね、志保さんのことを好きになって初めて、現代に生まれて良かったって、心から思えたんですよ。現代を生きていたおかげで、志保さんと出会えたんですから」
「利一さんてば、素敵」
「……照れくさいですね、その呼び方」

「慣れてください」

シートにもたれて目を閉じる。私は利一さんの助手席で、いつまでも優しく揺られていた。